２０２１年８月２３日発表

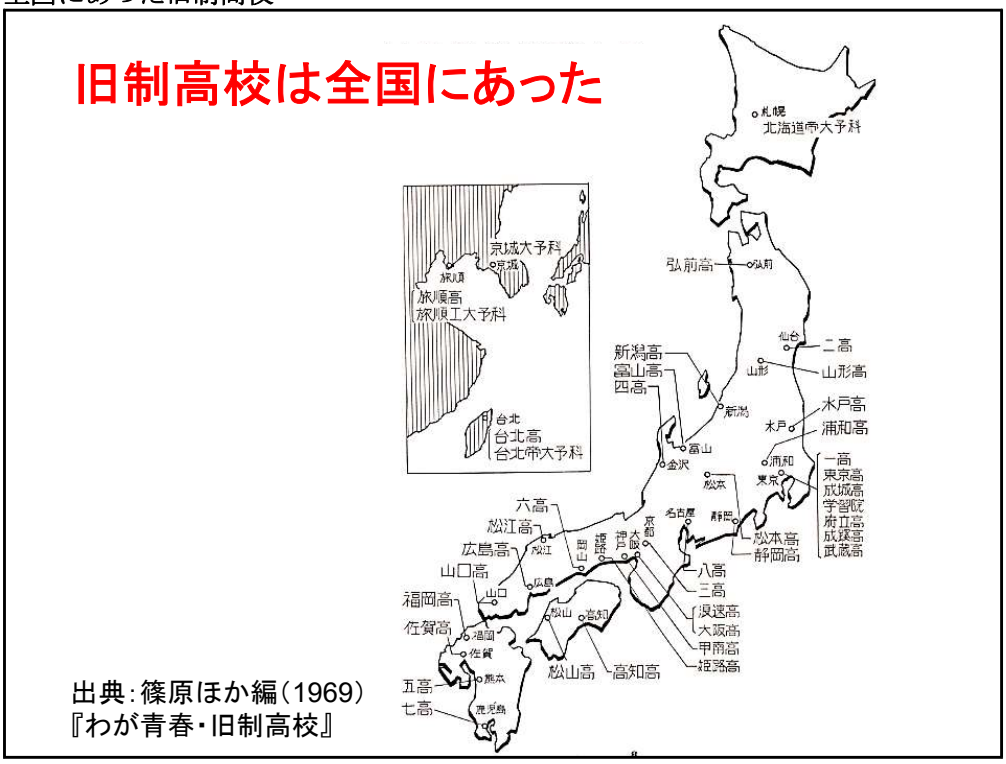
旧制高校を世界遺産にしよう

世界最先端の高等教育の実験

"Higher schools" in the former Japanese education as a World Heritage Site
The most advanced "experiment" of higher education in the world

丹野義彦　（東京大学名誉教授）
Yoshihiko TANNO,　Professor emeritus at the University of Tokyo

全国にあった旧制高校



出典：篠原ほか編（1969）
『わが青春・旧制高校』

［要旨］
旧制高等学校は、戦前の旧制度の高等学校のことであり、戦後の高等学校とは違って高等教育の機関であった。旧制高校は全国に30校以上あった。世界の高等教育はふつう 18 歳から始まるが、旧制高校は 16 歳から入学することができ、世界で最も若い年齢で高等教育がおこなわれた。旧制高校は世界の高等教育における最先端の「実験」であったと考えることができ、その実験は成功した。教育で重視されたのは外国語、哲学などの人文主義、西洋史、数学、ハイレベルの自然科学であり、国際的精神と科学的精神を養成し、日本社会の国際化に貢献した。ほぼ全寮制であり、学生による自治で管理された。在席した学生は高校を高く評価した。こうしたユニークな教育を記録し、資料を保存するために世界遺産に登録することを提案した。

［キーワード］旧制高等学校、世界遺産、高等教育、国際的精神、全寮制

[Abstract]
More than 30 "higher schools" were established in the former Japanese education system before World War II.　Although higher education usually begins at the age of 18 in the world, Japanese higher schools were able to enter at the age of 16, which was the youngest age in the world's higher education.　The higher school was the most advanced "experiment" of higher education in the world, and it was successful.　The education system emphasized western language, western philosophy, western history, mathematics and high-level natural science, which fostered international and scientific spirit, and contribute the internationalization of Japanese society.　Almost all students lived in dormitories, where self-management system by the students themselves was conducted.　The students who were present evaluated the school highly.　In order to recognize such a unique education system and to preserve the documents, registering as a World Heritage Site was proposed.

＜目次＞

１．旧制高校とは何か　　全国に30校以上あった
２．全国にある旧制高校の記念館
３．旧制高校を世界遺産にしよう
４．旧制高校の世界史的な意義　　旧制高校は世界の最先端の「実験」であった
５．世界で最も若く高等教育をおこなった旧制高校
６．教育の特徴　　国際的精神と科学的精神
７．旧制高校生のメンタリティ　　主体性と全寮制の実験
８．旧制高校の評価　　賞賛と限界
９．世界の歴史からみた旧制高校
１０．旧制高校は戦後に消えたのではない
引用文献

１．旧制高校とは何か　　全国に30校以上あった

旧制高校は全国に30校以上あった

旧制高校とは、戦前にあった高等学校のことであり、戦後の高等学校とは違ったものである。旧制高校は全国に30校以上あった。

これらの学校は、いっきに作られたわけではなく、いくつかの段階をへて、増やされていった。

旧制高校の数については、定義により、文献によって少し違う。渡部（1990）は32校としている。高橋（1986）は35校、秦（2003）と旧制高等学校資料保存会（1985）『旧制高等学校全書 第１巻 総説』では38校、篠原ほか（1969）では39校としている。違いはおもに戦後すぐに作られた学校や大学予科の取り扱いによるものである。

高等中学校から高等学校へと改称した学校

明治政府は、1872（明治５）年に「学制」を敷いて、義務教育制度を作った。これは、フランスの学校制度を参考にしたもので、日本を大きく８つの「大学区」に分け、１大学区を32の「中学区」に分け、１中学区を210の小学区に分けて、それぞれの大学区に大学校を作り、それぞれの中学区に中学校、それぞれの小学区に小学校を作るというシステマティックな計画であったが、財政難のために実現したのはわずかであった。

1886（明治19）年に、森有礼が学校令を出し、これにもとづいて中学校令が出され、第一高等中学校をはじめとする７つの高等中学校が作られた。これが実質的な旧制高校のはじまりである。そして、1894年には高等学校令が出され、高等中学校は高等学校と名称変更になった。高等学校は、高等教育の一環である。

第一、第二と番号がついているのは、設置の順番であるが、日本全国を８つに分けた大学区の番号の名残でもある。それぞれの大学区に１校ずつ作られたからである。ただ、いろいろな事情で遅れた学区もあり、高等中学校は第一から第五まで作られた。

山口高校と鹿児島高校は例外であり、薩摩藩と長州藩の藩校が、大学区とは別に高等中学校と認められた。「民立官管」と呼ばれ、民立ではあるが、お金は国が出した。九州の大学区には熊本に第五高等中学校があるにもかかわらず、となりの鹿児島に高等中学校が作られた（しかも藩校の造士館という名前がついていた）。九州には２つの高等中学校が作られたわけである。また、中国・四国地区の大学区には、後に岡山に第六高等学校が作られるにもかかわらず、山口に山口高等中学校が作られた。当時の薩摩・長州の藩閥政治がいかに強く、教育制度をも牛耳っていたことがわかる。

高等中学校から改称した高等学校　（設立順）

高等中学校		高等学校		新制大学へ
設立年	名称	設立年･改称年	名称	
1886（明治19）年	第一高等中学校	1894（明治27）年	第一高等学校	東京大学
1887（明治20）年	第二高等中学校	1894（明治27）年	第二高等学校	東北大学
1886（明治19）年	第三高等中学校	1894（明治27）年	第三高等学校	京都大学
1887（明治20）年	第四高等中学校	1894（明治27）年	第四高等学校	金沢大学
1887（明治20）年	第五高等中学校	1894（明治27）年	第五高等学校	熊本大学
1886（明治19）年	山口高等中学校	1894（明治27）年	山口高等学校	山口大学
1887（明治20）年	鹿児島高等中学造士館	1901（明治34）年	第七高等学校造士館	鹿児島大学

ナンバースクール

最終的には、第一高等学校から第八高等学校までが作られた。これらはナンバースクールと呼ばれる。

これらも紆余曲折をへて完成したものである。第一から第五は高等中学校がそのまま昇格した。鹿児島高等中学校は、1901年に第七高等学校となった。九州には２つのナンバースクールが作られたのである。さらに、高等中学校をへずに、はじめから高等学校として設立されたのが、1900（明治33）年の岡山の第六高等学校と、1908（明治41）年の名古屋の第八高等学校である。

旧制高校はこの段階で一段落し、しばらく新しい動きがなかった。

高等学校として設立された学校（１）　　（設立順）

高等学校		新制大学へ
設立年	名称	
1900（明治33）年	第六高等学校	岡山大学
1908（明治41）年	第八高等学校	名古屋大学

旧制高校の大拡張時代（大正デモクラシーの時代）

ほぼ20年間は、ナンバースクールだけだったが、大正時代に入ると、高等学校が全国に作られるようになった。大拡張時代である。義務教育（小学校）は、明治時代末の1911年までには、国民の99%に達するほど普及したので、大正時代になると、人々の関心は高等教育へと向かったのである。産業の発展と近代社会の発達にともない、高等学校・専門学校への入学希望者が激増したので、政府は1918（大正７）年に「高等学校令」を改訂し、高等教育機関の増設・拡張をおこなった。これが1919～1926年の高等学校の増設へとつながったのである。

まず、 1919（大正８）年に、ナンバースクール以外の、地名をつけた高校が３校作られた。新潟高等学校、松本高等学校、松山高等学校である。その後、各都市に続々と作られるようになった。地名のついた高等学校は地名スクールと呼ばれることもあるようだ。

日本国内だけでなく、台湾と中国にも高等学校は作られた。これらは文部省の所管ではなく、台湾総督府が所管する台北高等学校、関東局が所管する旅順高等学校である。

また、それまでの高等学校は官立（国立）であったが、それに加えて、私立・公立の高等学校も認められるようになった。1922年からは私立の高等学校（武蔵、甲南、成蹊、成城）が公認された。1929年には府立高等学校が公認された。

高等学校では、大正デモクラシーを背景に、自由主義・民主主義的な教育や学習の傾向が強まった。この時期には、教育界全体が生徒の個性・自主的な学習を重視する傾向が強まり、ユニークな大正新教育運動もおこった。

こうして、大正時代には、1919～1926年の間に23校が作られた。

最終的に、高等中学校時代を含む65年の歴史において約20万人の卒業生を出した。

高等学校として設立された学校（２）　　（設立順）

高等学校		新制大学へ
設立年	名称	
1919（大正8）年	新潟高等学校	新潟大学
1919（大正8）年	松本高等学校	信州大学
1919（大正8）年	松山高等学校	愛媛大学
1920（大正9）年	水戸高等学校	茨城大学
1920（大正9）年	山形高等学校	山形大学
1920（大正9）年	佐賀高等学校	佐賀大学
1920（大正9）年	弘前高等学校	弘前大学
1920（大正9）年	松江高等学校	島根大学
1921（大正10）年	大阪高等学校	大阪大学
1921（大正10）年	浦和高等学校	埼玉大学
1921（大正10）年	福岡高等学校	九州大学
1921（大正10）年	東京高等学校	東京大学
1922（大正11）年	静岡高等学校	静岡大学
1922（大正11）年	高知高等学校	高知大学
1922（大正11）年	台北高等学校	廃止
1922（大正11）年	武蔵高等学校	武蔵大学
1923（大正12）年	姫路高等学校	神戸大学
1923（大正12）年	広島高等学校	広島大学
1923（大正12）年	富山高等学校	富山大学
1923（大正12）年	甲南高等学校	甲南大学
1925（大正14）年	成蹊高等学校	成蹊大学
1926（大正15）年	浪速高等学校	大阪大学
1926（大正15）年	成城高等学校	成城大学
1929（昭和４）年	府立高等学校	東京都立大学
1940（昭和15）年	旅順高等学校	廃止

２．全国にある旧制高校の記念館

旧制高校の記念館や資料展示コーナーが全国にたくさんある。これらは大学や自治体によって運営されている。
おそらく、ご自分の街にかつて旧制高校があったことを知らない方が多いのではなかろうか。知っていたとしても、それがどんな学校だったかという知識は少ないのではなかろうか。
旧制高校は世界遺産にふさわしい「教育遺産」としての価値を持っている。ぜひご自分の街に、こんな貴重な教育遺産があることを見直していただきたい。観光遺産でもあり、ぜひ街おこしのためにご活用いただければ幸いである。

以下では、それらを紹介してみたい。
〇印をつけたのは、とくに本格的・積極的に資料を展示している場所である。

第一高等学校　　東京大学　駒場博物館（東京都目黒区駒場）
東京大学駒場キャンパスの駒場博物館では、第一高等学校の常設展示はないが、ときどき一高についての特設展示がおこなわれる。
2017年　東京大学駒場博物館所蔵第一高等学校絵画資料修復記念
—知られざる明治期日本画と「一高」の倫理・歴史教育—
2015年　一高理科へようこそ　—科学する心
2014年　2014年度 所蔵品展「修復された一高歴史画」
2013年　第一高等学校の実験機器　など
http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/
現在、一高に特化した記念館がないのは残念であり、私は後述のような整備の提案をしている。
なお、一高については、私の一高論を参照いただきたい（丹野、2016、2020）。

第二高等学校　　東北大学史料館（宮城県仙台市）
東北大学の片平キャンパスの東北大学史料館には、第二高等学校の資料が展示されている。
http://www2.archives.tohoku.ac.jp/

〇第三高等学校　京都大学百周年時計台記念館（京都府京都市左京区）
京都大学本部構内の中央ブロックには、正門の正面に百周年時計台記念館がある。この中に**「常設展　第三高等学校の歴史」**があり、三高の歴史などを本格的に紹介している。
http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/

〇第四高等学校　　石川四高記念文化交流館（石川県金沢市）
金沢市の中心部の第四高等学校キャンパスがあったところに、石川四高記念文化交流館が建てられている。ここで四高を本格的に紹介している。西田幾多郎に関する展示もある。
http://www.pref.ishikawa.jp/shiko-kinbun/

〇第五高等学校　　熊本大学 五高記念館（熊本県熊本市）
熊本大学の黒髪キャンパスの中に、第五高等学校の建物が保存されている。その建物の中がすべて五高を紹介する展示となっている。旧制高校の記念館としては最も本格的なもののひとつである。
http://www.goko.kumamoto-u.ac.jp/

〇第六高等学校　　六高記念館（岡山県岡山市）
岡山朝日高等学校のキャンパスの中に、六高記念館がある。六高について本格的に紹介している。見学するためには事前に予約が必要である。
http://www.asahi.okayama-c.ed.jp/asahi-map/PL_15.htm

第七高等学校　　鹿児島県歴史資料センター黎明館　七高造士館コーナー（鹿児島県鹿児島市）
鹿児島市にある鹿児島県歴史資料センター黎明館の中に、七高造士館コーナーがあり、第七高等学校造士館の資料が展示されているという（私は行ったことがなく、未確認情報）
http://www.pref.kagoshima.jp/reimeikan/

第八高等学校　　名古屋大学博物館（愛知県名古屋市）
名古屋大学東山キャンパスには、名古屋大学博物館があり、第八高等学校の写真などが展示されている。
http://www.num.nagoya-u.ac.jp/

〇弘前高等学校　　旧制官立弘前高等学校　外国人教師館資料室（青森県弘前市）
弘前大学の文京町キャンパスには、外国人教師館が保存されており、この中に資料室があり、弘前高等学校の資料が展示されている。
https://www.hirosaki-u.ac.jp/rft/hirosaki_highschool.htm

水戸高等学校　　水高資料展示室（茨城県水戸市）
水戸市立第一中学校の中に水戸高等学校の資料展示室があるが、見学するためには事前に学校の許可が必要である。
また、水戸市立中央図書館の２階に旧制水戸高等学校資料が展示されている。
https://www.library-mito.jp/facility/central.html

〇松本高等学校　　旧制高等学校記念館（長野県松本市）
旧制松本高等学校の敷地は、現在、あがたの森公園となっており、その中に旧制高等学校記念館がある。松本

高等学校だけでなく、全国の旧制高校の資料を展示している。旧制高校の記念館としては最も本格的なもののひとつである。

http://www.city.matsumoto.nagano.jp/sisetu/marugotohaku/kyusei_koukou/index.html

姫路高等学校　　姫路高校同窓会資料室（兵庫県姫路市）

兵庫県立大学のキャンパスにある「ゆりの木会館」に、姫路高等学校の資料室がある。見学するためには事前に学校の許可が必要である。

https://www.u-hyogo.ac.jp/shse/ishikura/lecture/yurinoki.pdf

甲南高等学校　　甲南大学学園史資料室（兵庫県神戸市）

甲南大学の甲南大学学園史資料室に、甲南高等学校の資料が展示されている。

https://www.konan-u.ac.jp/gakuen/gakuenshi/

○大阪高等学校・浪速高等学校　　大阪大学総合学術博物館（大阪府豊中市）

大阪大学の豊中キャンパスに大阪大学総合学術博物館があり、中に大阪高等学校と浪速高等学校の資料が展示されている。

https://www.museum.osaka-u.ac.jp/

松山高等学校　愛媛大学ミュージアム（愛媛県松山市）

愛媛大学の城北キャンパスにある愛媛大学ミュージアムの中に、松山高等学校の講堂模型が展示されている。

https://www.ehime-u.ac.jp/overview/facilities/museum/

なお、松山高等学校については、私の松高論を参照いただきたい（丹野、2019）。

高知高等学校　旧制高知高等学校記念展示コーナー（高知県高知市）

高知大学の朝倉キャンパスの学術情報基盤図書館 中央館(メディアの森)には、旧制高知高等学校記念展示コーナーがあり、高知高等学校についての資料が展示されている。

http://www.lib.kochi-u.ac.jp/opac/map/1f_index.htm

なお、高知高等学校については、私の論を参照いただきたい（丹野、2020）。

○台北高等学校　　臺北高等學校資料室（中華民国台北市）

台湾師範大学の図書館の８階に「臺北高等學校資料室」がある。このホームページには、資料室内のグーグルマップもあり、中を見ることができる。台北高校の歴史や文化をまとめており、関係する物や書籍が集められている。日本語の解説もあるので、わかりやすい。

http://history.lib.ntnu.edu.tw/taihoku/ja/%E5%8F%B0%E5%8C%97%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E8%B3%87%E6%96%99%E5%AE%A4/

台湾師範大学のキャンパスには、当時の台北高等学校の建物がたんさん現存していて、大学校舎として使用されており、当時の旧制高校の様子がよくわかる。台北高等学校については、私の台北論を参照いただきたい（丹野、2016）。

以上は、私が行って確かめたものを中心としており、この他にも記念館や展示コーナーはあると思われる。その場合はお知らせいただきたい。

３．旧制高校を世界遺産にしよう

旧制高校は貴重な教育遺産であり、世界遺産にふさわしい価値を持っている。私が世界遺産に推薦する理由をまとめてみよう。

○旧制高校は世界的にみて最先端の「実験」であり、それが成功したこと

①いかに若い学生に対して高等教育が可能かという「実験」であった。
②いかに学生の主体的な学習意欲を培うことができるかという「実験」であった。
③学生の主体的な学習を、国家の教育方針といかに接続できるのかを探る「実験」であった。
④旧制高校の全寮制は集団主義によるエリート教育が可能かどうかという「実験」であった。

旧制高校は、世界的な意味での最先端の実験的な学校であり、実験は成功した。在席した旧制高校生たちが、異口同音に「よかった」と評価したし、進学希望者がきわめて増えた。

○教育システムが独自だった

旧制高校は、大学への予備教育の機関であったが、その教育システムは独特だった。

教育内容として重視されたのは、外国語、哲学などの人文学、西洋史、数学、ハイレベルの自然科学であり、世界的視野の国際精神と科学的精神を養成するものであった。このことは日本社会の国際化にも影響を与えた。

また、少人数の人格形成教育が重視された。

○メンタリティの特徴がユニークである

旧制高校生のメンタリティの特徴として以下があげられる。これらは上に述べた実験の反映でもある。
①「実験」の反映として、学生の自治による全寮制が採用されて成功し、学生の自治の精神が発達した。
②「実験」が成功して学生が主体的に読書や議論に取り組むようになった。
③スポーツに力をいれ、スポーツの社会的普及にも貢献した。
④「実験」の反映として、独特のバンカラ意識とエリート意識の共存したメンタリティが発展した。

○体験者の評価がきわめて高い

在学した学生は異口同音に「よかった」という。「旧制高校は戦前の教育の最高傑作である」と高い評価を受けている。ただし、男子のみのエリートに限られた特権的な教育機関であったことへの批判的な意見もある。

○世界の歴史からみても意義がある

旧制高校は世界史の大きな流れの中で出てきたものであり、世界的文脈における高等教育の「実験」であった。世界の歴史に位置づけられる点でも世界遺産にふさわしい

○記念館や資料展示コーナーがたくさんある

全国各地に旧制高校の記念館や資料展示コーナーがあり、旧制高校の資料を保存する場が設けられている。

○貴重な資料や記録が散逸しないように

こうした最先端の実験学校がかつての日本にあったことを記録し、記憶し、世界に知らせ、その資料を体系的に収集・保存するために、「世界遺産」か「記憶遺産」とすることを提案したい。

旧制高校を体験した最後の世代はすでに80歳以上である。各地の旧制高校に関する貴重な資料や記録は散逸しつつある。今のうちに保存しないと、貴重な教育遺産が失われてしまう。世界遺産に登録して、そうした資料が組織的に収集・保存されることを願う。

また、全国各地にある「教育遺産」としての貴重な価値を見直すきっかけとしたい。「観光遺産」として、街おこしのきっかけにもしていただきたい。別にユネスコの世界遺産に登録それなくても、自治体が自発的にこれを「世界教育遺産」であると宣言するだけでもよいだろう。

『知の技法』
小林康夫・船曳建夫編
東京大学教養学部
基礎演習テキスト
東京大学出版会
1994年

丹野義彦
「アンケート：
基礎演習を自己検証する」
教養教育の歴史

ここで、私が旧制高校について本格的に関心をもったきっかけを紹介しておきたい。

私は1991年に東京大学教養学部の教育学教室につとめたが、すぐに「大学設置基準の大綱化」という法律改正があり、教養学部は改革なしには生き残れない状況となった。そこで、教養学部の改革がおこなわれ、その一環として1994年に「基礎演習」という授業科目が設置され、教科書が必要となった。それが『知の技法』（小林康夫・船曳建夫編、東京大学出版会、1994年）である。この本の副題は「東京大学教養学部基礎演習テキスト」である。この中で、私も教養教育の歴史を概観して、教養学部が置かれた歴史的経緯を調べた。この時、私は東京大学教養学部の前身である旧制第一高等学校（一高）について詳しく調べることになった。それ以来、旧制高校のとりことなった。

この本が出版されるまでには、紆余曲折があった。この本の編者はとても意識が高くて、私の原稿は、ただ歴史を述べただけで学問の方法論を述べておらず物足りないと評価されて、ボツになりかけた。「ボツ原稿でも原稿料は払う」という屈辱的な連絡が来たので、若かった私は発奮して、「アンケート調査」と多変量解析という方法論を加えることで、何とか掲載してもらうことができた。そのため、私の章のタイトルは「アンケート：基礎演習を自己検証する」というものになった。東大の教員内の競争はとても激しいと感じた。この本の著者紹介に、私は次のように書いたが、かなりネガティブな感じになってしまったのは、そうした背景もある。「最近の２つの気懸り。駒場では60歳の定年を待たずに亡くなられる教官が多い。三層構造駒場の激務の証拠だろうが、いずれにしても明日は我が身か。もうひとつは解体を余儀なくされている全国の教養部の行く末である。教養部の先生方にとって、本書が少しでも明るい（？）話題となることを。」

あれから30年近くが経った。結構な激務であったが、65歳の定年まで生きながらえて、ホッとしている。『知の技法』の執筆者は18名いるが、すでに全員が定年退職したか、教養学部を離れている。東大の教員が書いた本ということで、一部からは叩かれたが、おおむね好評であり、シリーズで続編や続々編も出た。

この旧制高校の魅力がどこにあるか、各地の旧制高校の跡を巡りながら、ずっと考えてきた。

提案　駒場キャンパスに一高記念館を作ろう

私は東京大学教養学部で教育学を教えてきたが、一高についての本格的な記念館がないのを残念に思っている。駒場博物館では、ときどき第一高等学校に関する特設展示がおこなわれるが、しかし、常設の資料展示がないのは残念である。ぜひ、一高に特化した記念館を作りたいものである。

以下は、東京大学駒場学生相談所紀要に発表した一高記念館設立の提案である（丹野､2017）。

旧制一高記念エリアの整備計画

学生相談所は１号館の中にありますが、１号館は旧制第一高等学校（以下、一高と略）からの歴史を持っています。東京大学の前期課程のルーツは一高にあります。旧制高校は「日本の教育制度の最高傑作だ」という人もあり、今後、私は「旧制高校を世界遺産に」というキャンペーンを始めたいと思っています。

私は次の４点からなる１号館の整備計画を提案します。

１）時計台を整備して公開する

１号館の時計台は、一高や東京大学の歴史の中で象徴的な意味を持っていました。以前は、学生相談所が毎年、時計台公開の日を設けていましたが、いつも数百人の見学者があり、「駒場にこんな面白い場所があったのか」と驚く教職員がたくさんいました。遠く富士山を望むこともできます。高木彬光の小説『わが一高時代の犯罪』では、時計台と１号館が密室事件の現場ともなりました。時計台は今は施錠されていますが、整備して公開することはできないでしょうか。

２）１号館の中庭にカフェを入れて「憩いの場」とする

１号館の中庭は一高の学生にとって、授業の合間のくつろぎの場所でした。１号館の北側には、イチョウ並木に面してアーケードがありますが、これは「弥生門」と呼ばれていました。この中庭をゴミ置き場にしておくのはもったいないことです。ファカルティハウスの中庭のように、木を植えパラソルを置き、緑豊かなスペースにできないものでしょうか。カフェを入れたりすれば、学生の憩いのスペースとして再生できるでしょう。

３）地下トンネルを「一高記念地下道」として公開する

駒場キャンパスには地下トンネルがあります。トンネルはＴの字型をしており、上のーの部分は、１号館から101号館を通り、コミュニケーションプラザ南館に至っています。下の｜の部分は、101号館から南下して博物館まで通じています。今は封印されていますが、公開することはできないでしょうか。そうすれば歴史遺産としての価値も明らかになりますし、学生にとっても、雨の日など１号館とコミュニケーションプラザの食堂を結ぶ便利な通路になるでしょう。

４）一高記念館を中心とした一高記念エリアを整備する

旧制高校の中で、一高ほど当時の建物がそのまま保存されているところもありません。１号館・正門・900番教室・博物館・101号館は、一高の建物がそのまま保存され使われています。とくに、時計台のある１号館は、周りにはいろいろな歴史的記念物があり、まさに一高のシンボルともいうべき建物です。

全国の旧制高校には記念館が作られているのに、一高には記念館がありません。以前は一高同窓会の事務局があり、資料を保存していましたが、2013年閉鎖されてしまいました。ぜひ一高記念館を作りたいものです。その場所として最もふさわしいのは１号館です。１号館は文化庁の「登録有形文化財」に登録されており、取り壊すことなどはできないので、記念館にすれば有効活用できるでしょう。記念館を中心に、１号館の周辺の歴史的記念物を含めて、「一高記念エリア」としたいものです。

このようなことを考えているうちに、これは一高だけの問題ではなく、全国の旧制高校にも当てはまる問題であることがわかり、思い切って世界遺産にすれば、こうした問題も解決に向けて大きく進むのではないかと思うようになったのである。

４．旧制高校の世界史的な意義　　旧制高校は世界の最先端の「実験」であった

これから、旧制高校が世界遺産にふさわしい理由を詳しく説明していきたい。
まず、旧制高校は世界史的な意義がある。世界の教育史からみても、高等教育における最先端の「実験」施設であった。そして、その実験が成功を収めた。

高等教育の開始年齢の実験

第１は、いかに若い学生に対して高等教育が可能か、その準備教育が可能かの「実験」であった。世界的には、高等教育は18歳からはじめるという常識がある。これに対し、旧制高校は、16歳から高等教育を始めた。常識よりも２歳も若い。これは世界に類を見ない若さであり、世界で最も若い学生に対して、高等教育をおこなった稀有な学校である。

主体性と学習意欲の実験

第２に、旧制高校は、自由な環境の中で、学生がいかに主体的な学習意欲を培うことができるかという「実験」であった。
旧制高校では、大学受験の強い制約もなく、３年間自由に勉強できた。自由はともすれば「放任」となり、学生が主体的な学習意欲を失う危険性があった。それを避けて、学生の主体的な意欲を培うために、政府はお金をかけて、多くの優秀な教員を配置して、少人数教育が達成され、教員との人間的交流を深めた。また、立派な寮や校舎が完備され、スポーツ施設をともなった広大なキャンパスが作られた。これにより、寮の自治や、スポーツなどの校友会活動が活発となり、学生の主体的な学習態度が達成された。

主体性と国家の方針の共存についての実験

第３に、旧制高校は、学生の主体的な学習を、国家の教育方針といかに共存できるのかを探る「実験」であった。
そもそも学生の主体性とは個人的なものであり、国家の教育方針とは関係のないものである。旧制高校ではしぜんにそれらが結びついた。それは次のようなメカニズムである。戦前の小学校・中学校では、国から「支配される側」の注入主義教育がおこなわれており、一方、大学では、国の立場で「支配する側」としての教育が行われた。その境界にある旧制高校では、生徒の視点を「支配される側」から「支配する側」へと転換させる必要があった。まず、「支配される側」の視点を解除するために、学生の主体性を重んじた自由な教育方針や校風が作られ、規則や道徳を一時的に逸脱するバンカラ（ストームなど）も許容された。さらに、「支配する側」のエリート意識の視点を注入するために、寮生活の自治などを通して禁欲的なエリート主義や「籠城主義」が強調された。バンカラ意識とエリート意識は、一見矛盾するように見えるが、実は同じメンタリティの裏と表である。大学へ進むころには、自覚的な「支配する側の視点」が完成した。旧制高校は視点の転換装置として機能した。かくしてこの「実験」は成功し、旧制高校の学生は、主体性を持ちつつ、国家の「支配する側」の大学教育へと無理なく接続されていった。

全寮制の実験　集団主義によるエリート教育の可能性

第４に、旧制高校の多くは「全寮制」をとったが、これは集団主義によるエリート教育が可能かどうかの「実験」であった。
全寮制の始まりは、1890（明治23）年に、第一高等学校の木下廣次校長が、入学した学生全員に寮生活をさせたことにある。木下は寮の管理を学生に任せ、自治の空間とした。西洋のエリート教育は、個人のエリート意識を育てるものであるが、旧制高校の全寮制は集団主義によってエリート意識を育てる試みであり、他に例をみないユニークな制度である。
この木下の実験は成功したといえる。全寮制を体験した旧制高校生の多くが、寮生活を高く評価している。寮の自治の精神によって、学生は、主体的な意欲を強く持ち続け、社会や政治に背を向けることなく、社会性を持ち得た。また、自治の全寮制が、日本全国の旧制高校に広まったことも、実験の成功を示している。学寮制は、オクスフォード大学やケンブリッジ大学などイギリスで発達したが、その起源はキリスト教の修道院にあった。これに対し、日本の旧制高校の全寮制は、宗教的な理由ではなく、教育思想（自治、籠城主義、集団主義のエリート教育）や学生の指導管理の理由から取り入れたものであり、世界的に例を見ないことである。

世界的にユニークで例のない教育機関

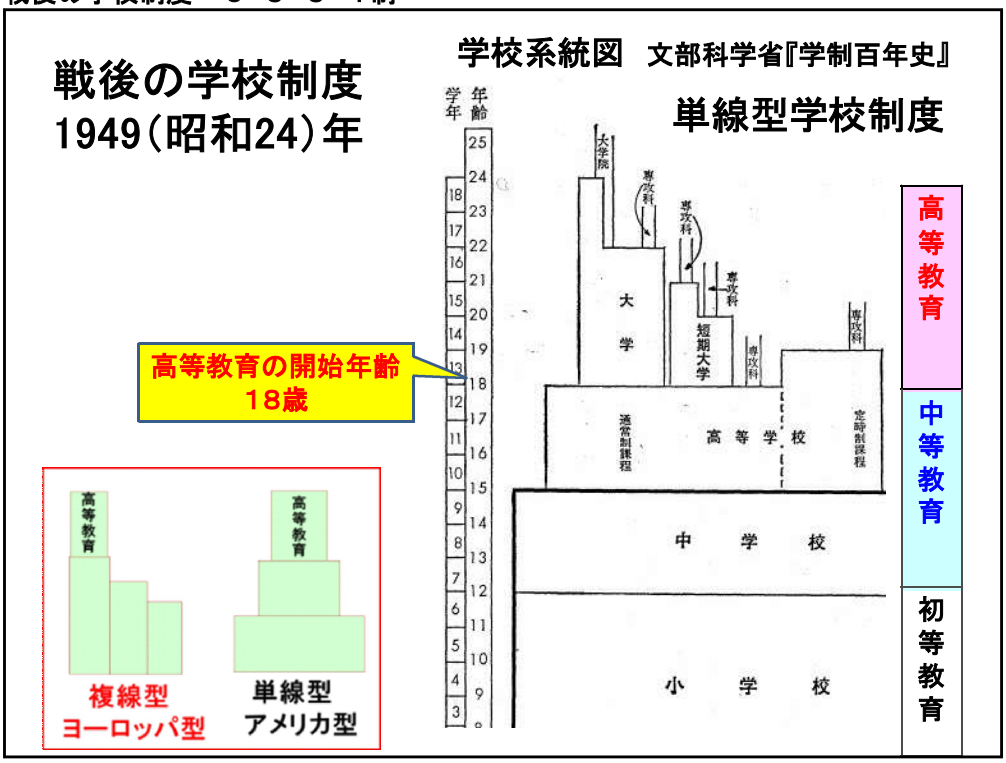
世界の教育史で考えても、旧制高校はユニークで例のない教育機関であった。
旧制高校は、日本政府の西洋化・近代化の政策から試行錯誤で育ってきたシステムであり、世界のどの教育機関にも例のないユニークなものである。例えば、世界にはユニークな「大学」がたくさんあるが、旧制高校は、大学の予備教育機関という点で、大学そのものではない。また、イギリスのパブリックスクールやグラマースクール、ドイツのギムナジウム、フランスのリセなど、有名な学校はあるが、これらは中等教育であり、高等教育の旧制高校とは違う。アメリカのハイスクールとも全く異なる。フランスのグランゼコールは、ある意味で大学を凌ぐ高等教育機関であるが、これは高等専門学校であり、旧制高校の位置づけとは違う。

以上のように、旧制高校は、世界的に最先端の実験的な学校だった。こうした実験は成功した。在席した旧制高校生たちが、異口同音に旧制高校を高く評価したし、大正時代になって、旧制高校への進学希望者が極めて増えたことも、この実験が成功したことを示している。つまり、世界の教育史の中でも大きな意義のある稀有な実験だったといえる。
しかし、いくらうまくいったからといって、今の日本にそのまま復活させても意味はないし、そもそも不可能である。第１に、戦後の教育制度は、市民教育の平等理念に変わり、高等教育もエリートを育てる場所ではなくなったからである。第２に、財政的にもこれだけお金のかかる学校を全国に作ることは不可能である。戦前のエリート主義教育を復活せよなどというつもりはない。
ただ、せめて、こうした実験的な最先端の学校がかつての日本にあったことを世界に知らせ、記録し記憶したい。そのために「世界遺産」としてはどうかと思うのである。

５．世界で最も若く高等教育をおこなった旧制高校

旧制高校は日本独自のシステムであり、欧米をマネしたわけでもない。世界の教育の歴史からみると、旧制高校は、世界で最も若い年齢から高等教育をおこなった学校である。こうした点で世界史的な意義があり。世界遺産にふさわしい。

戦後の学校制度　６－３－３－４制



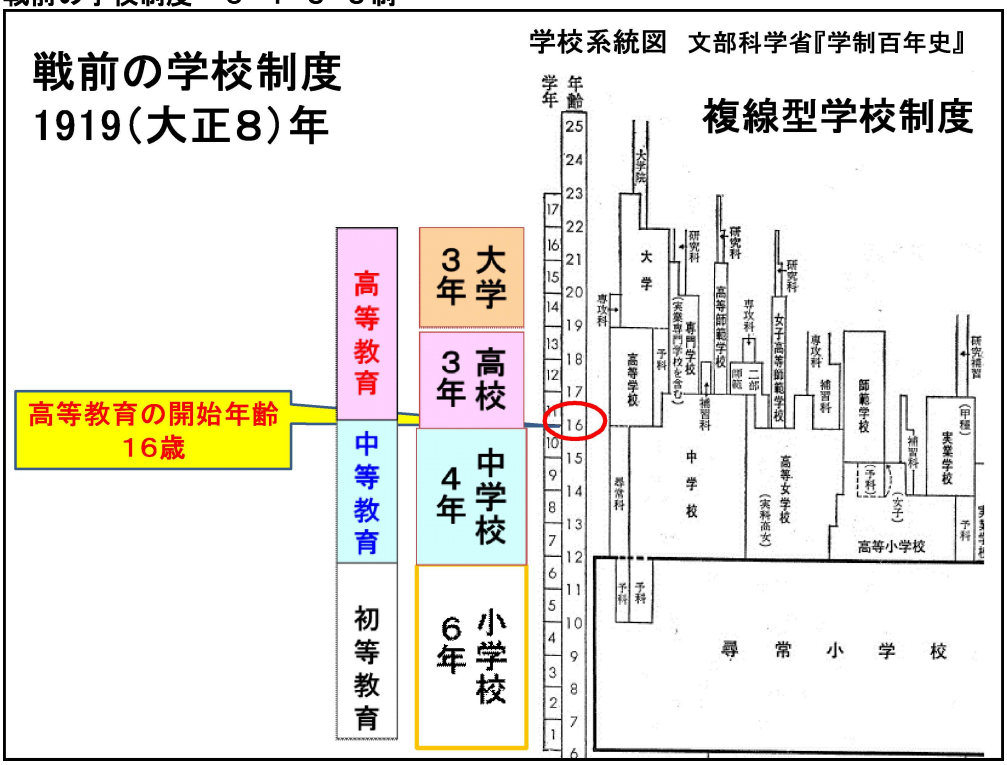
まず、日本の戦後の学校制度から確認しておこう。
上の図は、戦後の学校系統図である。1949（昭和24）年に完成し、今に至る。
「単線型学校制度」とよばれ、どのコースをとっても大学に入ることができる。
小学校６年、中学校３年、高等学校３年、大学４年という６－３－３－４制の制度である。
学校は、初等教育（小学校）、中等教育（中学校と高等学校）、高等教育（大学）の３段階からなる。高等学校は中等教育に属することに注意しておこう。
この図に示すように、高等教育（大学）の開始年齢は１８歳である。

出典：文部科学省（1981）学制百年史 資料編.
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318188.htm
＊この文部科学省『学制百年史』の「学校系統図」は、すべて満年齢で表示されている。日本は戦前は「かぞえ年」を用いており、「かぞえ年」は満年齢よりも最大で２歳若くなるが、以下の記述ではこのような数え方の違いは考慮する必要がない。

単線型と複線型の学校制度

左下の図で「単線型学校制度」について説明しよう。これは、右側のように、どのルートをとっても高等教育（大学）に行ける平等型システムである。アメリカで発展した制度であり、戦後の日本は、アメリカ軍の指導でこれを取り入れたのである。
これに対して、左側は「複線型学校制度」という。特定のルートに進まないと高等教育（大学）にたどりつけない。ヨーロッパで発達したものであり、社会の階級制度を反映した学校制度である。学校制度が階級制度を支えるという側面もあった。戦前の日本はこのヨーロッパ由来の複製型学校制度をとっていた。

戦前の学校制度　６－４－３－３制



上の図は、戦前の日本の学校系統図である。1919（大正８）年から太平洋戦争までのものである。

旧制学校制度

戦前の学校制度は「旧制」と呼ばれる。旧制中学校、旧制高等学校（旧制高校）、旧制大学などと呼ばれる。

複線型学校制度

戦前の日本は「複線型学校制度」をとっていた。

尋常小学校（６年）までは全員が共通している。卒業して、中等教育に進むと、中学校（４～５年）、高等女学校（４年）、高等小学校（２年）など多くの種類の学校があった。このうち、大学（３年）に進めたのは、高等学校（あるいは大学予科、３年）に進んだ者だけである。高等小学校や高等女学校を出ても大学には進めなかった。

太平洋戦争に突入すると、各学校の年限は短縮された。

戦前の高等教育

戦前の高等教育（旧制高等教育）をみると、①大学予備教育、②大学教育、③専門学校教育の３種類からなっていた（寺崎、1990）。①の大学予備教育には、高等学校や大学予科などが属する。②大学教育は大学のことであり、③専門学校教育には、医学・工学・法学・商業などのさまざまな高等専門学校が含まれていた。

旧制大学

戦前の大学（旧制大学）は、標準的には20歳～22歳の学生を対象とする３年制である。

旧制大学は、法科大学（法学部）、医科大学（医学部）、工科大学（工学部）などに分かれて、専門職業教育をおこなっていた。

なお、大学院は戦前にもあったが、学生数はきわめて少なく、実質的な教育はおこなわれていなかった。

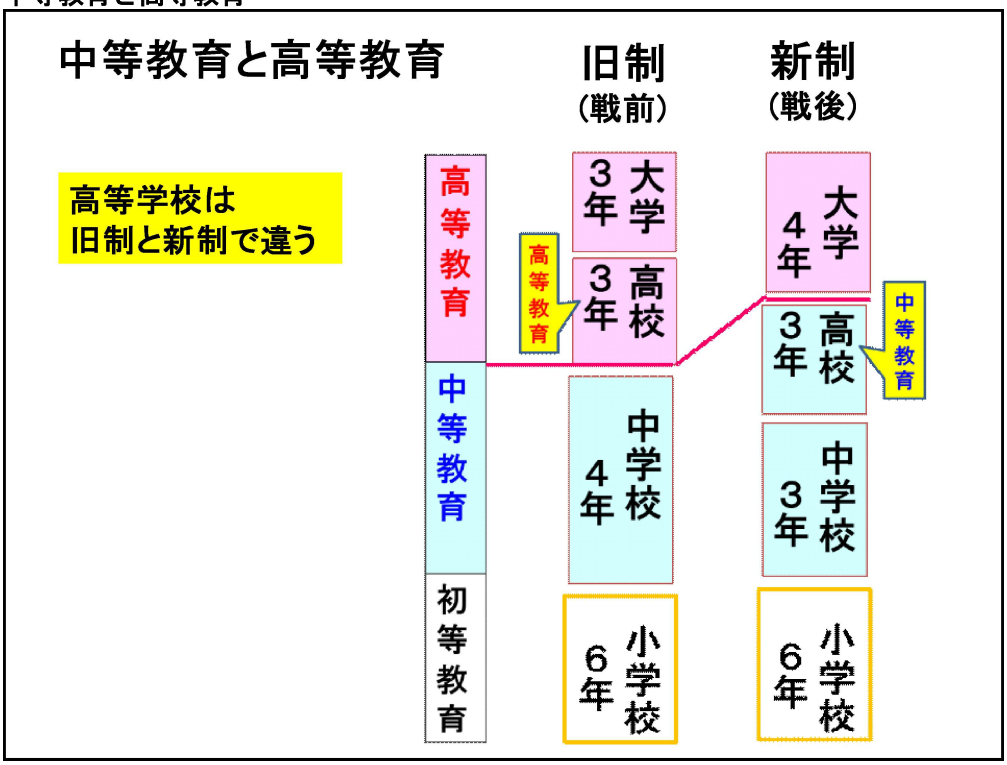
旧制高校

戦前の高等学校（旧制高校）は、標準的には16歳～18歳の学生を対象とする３年制である。

旧制高校では、大学に進むための予備教育がおこなわれた。旧制高校は、「大学予備門」と呼ばれた時期もあったように、大学への予備教育のために作られた。

例えば、第一高等学校は、歴史的には、外国語学校→英語学校→大学予備門→高等中学校→高等学校といった名称変更をへて、1894年に作られたものである。その歴史的経緯については、私の一高論（丹野、2016、2020）を参照していただきたい。

中等教育と高等教育



中等教育と高等教育の区別は、本論にとって重要である。

初等・中等・高等教育

学校教育は、初等教育（Elementary education）・中等教育（Secondary education）・高等教育（Higher Education）の３段階に分かれ、これは世界各国で共通している。

戦前の日本では、初等教育（小学校）、中等教育（中学校など）、高等教育（高等学校、大学など）であった。つまり、高等学校は高等教育に属している。

これに対し、戦後の日本では、初等教育（小学校）、中等教育（中学校、高等学校）、高等教育（大学など）であり、高等学校は中等教育に属している。

世界各国の高等教育の共通点は、ユネスコによると、①入学基礎資格が中等教育の修了であること、②通常入学年齢がほぼ18歳であること、③カリキュラムが所定の特典の授与に通じるものであること、などである（寺崎、1990）。②についてみると、前述のように、旧制高校の開始年齢は16歳であり、いかに若い年齢から高等教育をはじめたかがわかる。

高等学校の位置づけは戦前と戦後では異なる

このように、同じ「高等学校」という名前であるが、「高等学校」の位置づけが戦後と戦前では違うのである。上の図に示すように、戦前の高等学校は「高等教育」に属し、戦後は「中等教育」に属している。戦前の高等学校は、大学予備門と呼ばれたこともあるように、大学教育の一部とみなされていたからである。

英語表記は、旧制高等学校は higher school であり（渡部,1990）、戦後の新制高等学校は high school または senior high school であり、異なっている。

高等教育に属していた旧制高校

旧制高校が、中等教育ではなく、高等教育に属していたのは、以下のような点にも現れている。

１）教育内容

旧制高校の教育内容（カリキュラム）は、次に述べるように、第二外国語が充実していたり、哲学があったり、自然科学がかなり重視されており、大学で学ぶための予備教育・基礎教育であった。戦後の高等学校とは違う。むしろ新制大学の教養課程と似ている。

２）教員

教員の呼び方や待遇も高等学校が高等教育に属していたことを示す。戦前には、中学校の教員の職名は「教諭」であり、旧制高校や大学の教員の職名は「教授」である。戦後の高等学校の教員の職名は「教諭」である。

３）進学人数と入学試験

入学定員は高等学校と大学ではほぼ同じであった。これも高等学校が高等教育であったからである。

高等学校への入学試験はかなり厳しく、狭き門であった。ナンバースクールの時代の入試競争率は、平均して５倍であり、高等学校が増設された大正時代以後も３倍と高かった。

これに対し、大学の入学試験は、高校受験に比べると、かなりユルいものだった。というのは、大学の定員は、高等学校の定員とほぼ同じだったので、卒業後、大学や学部を選ばなければ、ほぼ全員が大学に進むことができたからである。無競争で入れる大学の学部もあった。

ちなみに、現在の東京大学の前期課程から後期課程への進学選択（以前は進学振り分けといった）は、旧制大学の入試の名残である。学部や学科を選ばなければ、ほぼ全員が後期課程に進むことができる。

４）戦後の旧制高校の行方

戦後に、旧制高校は、後述のように、新制の高等学校になったのではなく、大学の教養課程に吸収された。このことも旧制高校が高等教育に属していたことを裏書きする。

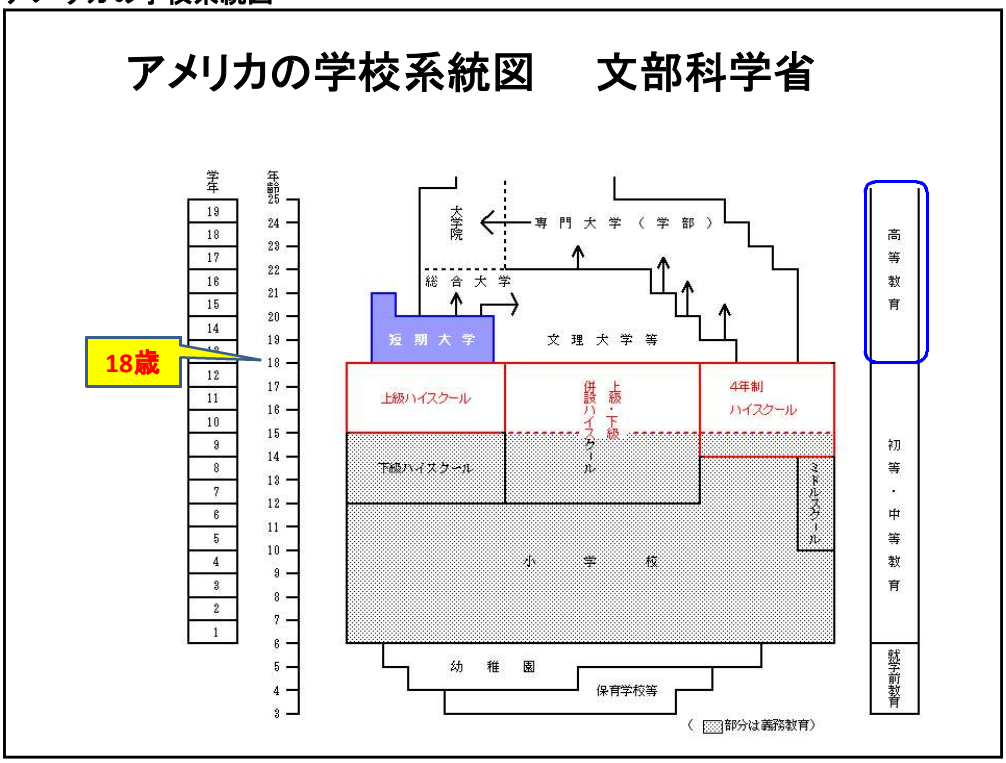
世界で最も若い年齢から高等教育をおこなった旧制高校

前述のように、戦前は、高等教育の開始年齢（つまり高等学校への入学年齢）が１６歳であった。戦後の高等教育の開始年齢が１８歳であるのと比べると、２歳若い。このことの意義は大きい。

１６歳という早い段階から高等教育を受けるというのは、世界の学校制度を見渡しても、例がない。以下で示すように、高等教育の開始年齢は、アメリカやイギリスでは１８歳であり、ドイツでは１９歳なのである。

旧制高校は世界で最も若い年齢から高等教育をおこなった学校であり、若い時期から高等教育に触れることによって、学生たちは高度な知的訓練を受けることになった。世界でも類を見ないユニークな学校制度だった。

アメリカの学校系統図



以下、欧米各国の高等教育の開始年齢をみてみよう。

出典：文部科学省（2008）諸外国の後期中等教育及び短期高等教育における職業教育.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/015/siryo/attach/1374960.htm

まずアメリカを見てみよう。今の日本と同じく、６-３-３-４制の単線型学校制度である。

アメリカの学校制度は、州によって異なるが、多くは「６-３-３-４-院」制度をとっている。

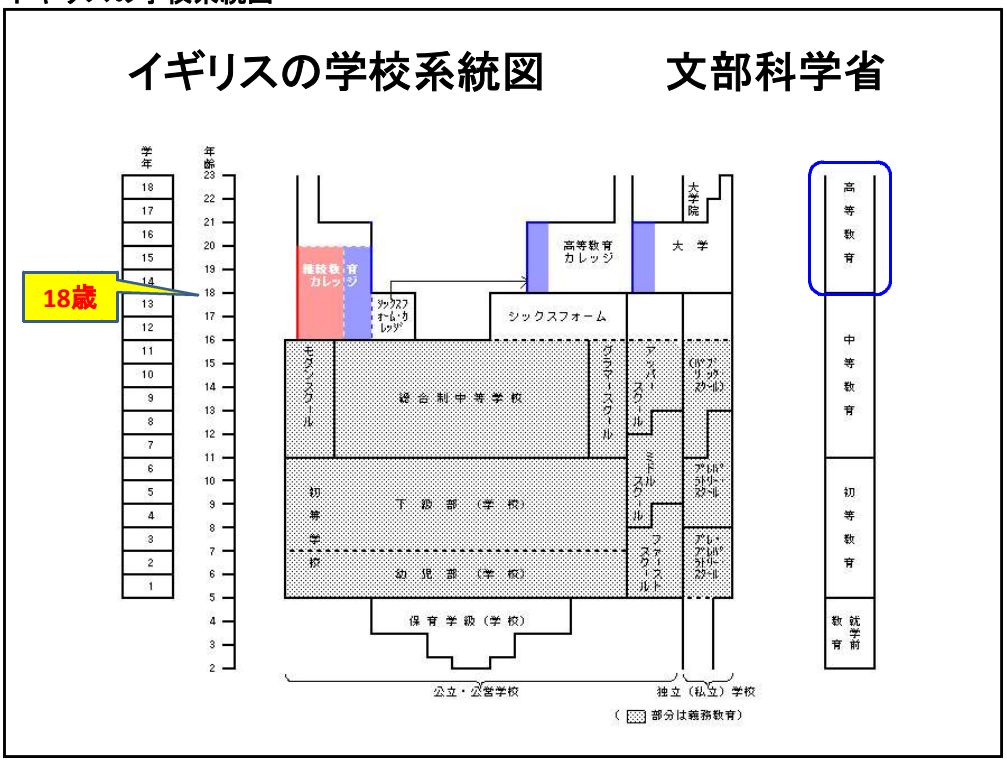
図のように、初等教育はElementary School（６年）、中等教育はJunior High School（３年）とSenior High School（３年）からなり、高等教育は大学（４年）と大学院（数年）からなっている。

今の日本と同じであるが、これは戦後の日本がアメリカをモデルとして制度を作り直したためである。同じなのは当然である。

アメリカでも高等学校は「中等教育」に属する。高等教育は大学から始まる。なお、アメリカの高等教育は、大学院が発達している。

高等教育の開始年齢（大学への入学年齢）は１８歳である。

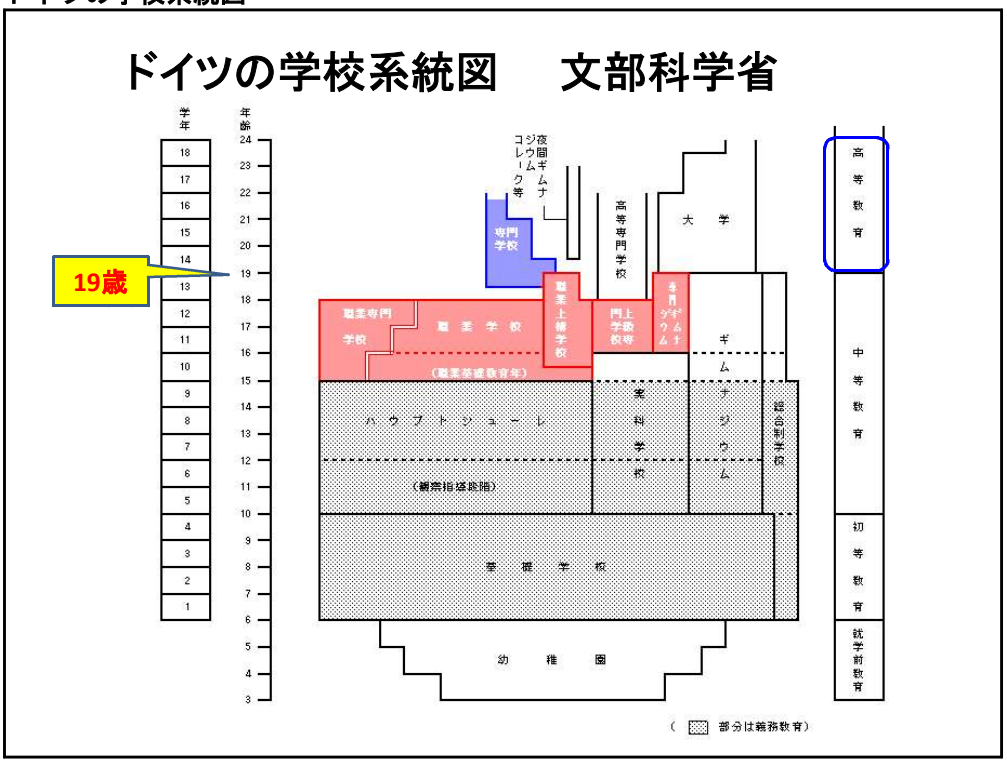
イギリスの学校系統図



次にイギリスをみてみよう。イギリスは複線型学校制度である。中等教育が複雑で、いろいろな種類の学校が並立している（グラマースクール、モダンスクール、統合性中等学校、パブリックスクールなど）。

高等教育の開始年齢（大学への入学年齢）は１８歳である。

ドイツの学校系統図



ドイツも複線型学校制度である。中等教育が複雑で、いろいろな種類の学校が並立している。９年制のギムナジウム、６年制の実科学校、５年制のハウプトシューレなどがあり、それぞれ年限が違うので、大学に行けるのはギムナジウムに入った者だけである。複線型の典型といえる。

高等教育の開始年齢（大学への入学年齢）は１９歳である。他の国に比べると遅い。

世界でもユニークな学校制度　旧制高校

以上のように、戦前の日本の高等学校（旧制高校）は、欧米のどの国をモデルとしたわけではなく、日本独自の高等教育システムである。旧制高校は、中等教育ではなく、高等教育の一部であり、これも欧米にもみられないユニークな特徴である。

世界で最も若い年齢から高等教育をおこなった学校　旧制高校

しかも、旧制高校は、１６歳で高等教育を行っていた。世界の教育の歴史からみても、旧制高校は、世界で最

も若い年齢から高等教育をおこなった学校として意義がある。
　この点で、旧制高校が世界遺産としてふさわしいと思われる。

６．教育の特徴　　国際的精神と科学的精神

＜目次＞
６－１．大学への予備教育
６－２．外国語の重視
６－３．人文主義の重視
６－４．数学とハイレベルの自然科学
６－５．国際的精神と科学的精神
６－６．少人数の人格形成教育

６－１．大学への予備教育

旧制高校の教育の特徴は、大学に進むための予備教育という点である。大学では、法学や医学のような職業に直結する実践的な専門教育や研究がおこなわれたので、旧制高校ではそのための基礎教育（一般教育、教養教育）がおこなわれた。直接社会の役に立つわけではないが、知的訓練にとっては必要な科目が中心であり、教養を身につけることが重視された。西洋の大学のリベラルアーツ（自由七科）の概念に近い。第一高等学校の校長をつとめた天野貞祐は、旧制高校が成功した理由として基礎教育であったことをあげ、次のように述べている。「職業と直接せず、職業意識にわずらわされないことが自己目的性の会得に適している。さまざまな志望をもつ生徒の集団であることが、また重要な契機である」（筧田、1975）。

旧制高校でどのような教育がおこなわれていたか、以下、具体的に見てみよう。

1922（大正10）年から、文部省は、科目ごとの「高等学校高等科教授要目」を発表した。これは高等学校の授業の標準化をはかるためである。それぞれの科目について、授業時間、教授目標、学年別教授内容、教授上の注意事項がまとめられている。以下に示す表は、その時間数を抜き出したものである。

出典：旧制高等学校資料保存会（1981）旧制高等学校全書 第３巻 教育編．昭和出版．

６－２．外国語の重視

下の表は外国語科目の時間数である。

文科生も理科生も外国語の授業は３年間続く。例えば、第一外国語英語、第二外国語をドイツ語を取った文科生は、年間、英語720時間、ドイツ語360時間となる。１学年40週として計算すると、１週に９時間の外国語があった。平均すると、授業時間の４割を占めていた（渡部,1990）。

このように外国語はかなり重視されていた。明治以降の日本の学問は、西洋の進んだ文化を輸入することに力を入れたため、英語・ドイツ語・フランス語が重視された。大学の授業は外国語でおこなわれ、大学の教科書は外国語のものだったので、外国語ができなければついていけなかった。そこで、大学に入る前に、旧制高校で外国語をみっちり習っておく必要があった。

外国語の重視は、第一高等学校の起源が、東京外国語学校にあることからもわかる。旧制高校はもともとは外国語学校から出発したところも多い。第一高等学校は、歴史的には、外国語学校→英語学校→大学予備門→高等中学校→高等学校と名称が変った。

私が、一高の後身である東京大学教養学部につとめたときに思ったのは、外国語と哲学の教員がやたらに多いということであった。一高のルーツが東京外国語学校だと知って、納得できた。一高の歴史的経緯については、私の一高論を参照していただきたい（丹野、2016）。文Ⅲの駒場時代は英語もドイツ語も嫌いで勉強せず、大学院に入ってから研究者として英語の論文を読まなくてはならなくなって、死ぬような思いをして身につけた私にとって、外国語はトラウマに近かった。

表　外国語科目の時間数

		学年	文科（時間数）	理科（時間数）
英語	第一外国語	1	270	240
		2	240	180
		3	240	180
	第二外国語	1	90	90
		2	90	90
		3	90	90
ドイツ語	第一外国語	1	330	300
		2	300	270
		3	300	270
	第二外国語	1	120	120
		2	120	120
		3	120	120
フランス語	第一外国語	1	330	300
		2	300	270
		3	300	270
	第二外国語	1	120	120
		2	120	120
		3	120	120

６－３．人文主義の重視

下の表は文系の科目である。

まず、哲学概説、心理学、論理学、倫理学など、哲学の科目が多いことがわかる。文科生だけでなく、理科生も必修である。哲学概説は３年生で90時間学ぶ。心理学と論理学は、学年が指定されていないが、60時間ずつ学ぶ。倫理学は、修身に含まれている。1930（昭和５）年から、国家体制の強化によって、国民道徳も加わった。

旧制高校の教育の特徴は「人文学」の重視といわれる。人文学は、哲学などの文系科目が中心であり、古典やヒューマニズム（人間中心主義）を重視した。

西洋の哲学は、旧制高校生にとっては、知っていて当たり前のことであった。旧制高校の学生に流行した歌に「デカンショ節」があるが、これはデカルト、カント、ショーペンハウエルのことである。彼らはこういう西欧の哲学書を読んで、議論する雰囲気があった。旧制高校生の３大愛読書は『善の研究』『三太郎の日記』『愛と認識の出発』であるが、３冊とも難解で、哲学の知識は当然の前提である。例えば、倉田百三の『愛と認識との出発』を読むと、西洋の哲学者が当たり前のように出てくるし（後述）、心理学や倫理学もよく勉強していた。

前述のように、東京大学教養学部に赴任したときに、私は哲学の教員がやたらに多いと感じたが、これも旧制高校時代からの伝統だろう。

国語・漢文、歴史、地理といった科目は、外国語学校とした作られた大学予備門では教えられていなかったが、のちに普通教育強化の方針により加わった（丹野、2016）。

こうした普通学校化の動きを担ったのは、一高の杉浦重剛予備門長であり、これにより、大学予備門は、単なる外国語学校ではなくなり、普通教育の学校へと変わっていき、それが高等学校の骨格を作ることになる。

国語・漢文は、それまで英語や洋学に偏りすぎていたことを反省し、1879年に、日本語の作文の科目として加えられた。

歴史は、日本史、東洋史、西洋史に分かれている。とくに西洋史が重視され、180時間となっている。２年生（60時間）では、上古（古代）、中古（ゲルマン民族の大移動からルネサンスまで）を学ぶ。３年生（120時間）では、今古（宗教改革から西洋の植民地政策まで）、近世（「ナポレオンの偉業」から列強の世界政策まで）、現代（第一次世界大戦から、最近の文化思潮［民主的傾向、労働運動、婦人運動、平和主義］）を学ぶ。外国語学校の時代から、外国語教育の基礎として西洋史は重視されていたが、1882年には日本歴史が加えられ、のちに東洋史も加わった。

修身については、1881年に、それまでの知育偏重を改めるために、修身学が加えられ、徳育にも配慮した。

体育は、学生の健康を保つために加えられた。「高等学校高等科教授要目」には、「体操」の科目があるが、時間数の規則はない。

表　文系科目の時間数

		学年	文科（時間数）	理科（時間数）
哲学概説		3	90	90
心理学			60	60
論理学			60	60
修身	実践道徳		30	30
	国民道徳		30	30
	倫理学		30	30
国語・漢文		1	毎週3	毎週2
		2	毎週2	
		3	毎週2	
歴史	日本史	1	90	90
	東洋史	2	90	90
	西洋史	2	60	60
		3	120	120
地理			60	60
法制			60	30
経済			60	30

６－４．数学とハイレベルの自然科学

下の表は理系科目である。

旧制高校の教育は、外国語や人文学が中心ではあったが、数学や自然科学の教育も重視された。そのレベルも世界レベルだったといわれる。

数学については、文科は１年だけだが、理科は学年を特定せずに多くの科目があった。理科数学は、立体幾何、三角法、解析幾何、代数、微分積分、力学と細かく指定され、計420時間学ぶことになっている。

「図画」という科目があった。１年で自在画・幾何画、２年と３年で立体幾何画となっている。いわゆる図学のことである。旧制高校のキャンパスには必ず「製図室」が設けられていた。

自然科学の中心にあるのは物理と化学で、両者はつねに対等である。２年と３年で180時間ずつ、さらに３年では「実験」が60時間あった。

生物学は、植物学、動物学、鉱物・地質からなり、それぞれ60時間である。

文科生にも理科生と同じ時間が必修となっている。

旧制高校のキャンパスにはどこでも、物理、化学、生物（博物学）などの立派な教室や実験室が整備されていた。

旧制高校の自然科学はハイレベルであった。以前に、駒場博物館で「一高の理化展」という特設展示があったが、それによると、旧制高校の教員から世界的科学者も出ていた。

表　理系科目の時間数

		学年	文科（時間数）	理科（時間数）
文系数学		1	90	
理科数学	立体幾何			20
	三角法			40
	解析幾何			70
	代数			60
	微分積分			170
	力学			60
図画	自在画・幾何画	1	60	60
	立体幾何画	2	60	60
	立体幾何画	3	60	60
物理		２・３	180	180
	実験	3	60	60
化学		２・３	180	180
	実験	3	60	60
生物	植物学		60	60
	動物学		60	60
	鉱物・地質		60	60

６－５．国際的精神と科学的精神

以上のように、旧制高校で重視された科目は、外国語（英語・ドイツ語・フランス語）、哲学（とくに西洋哲学）、西洋の歴史、数学、自然科学などである。つまり、旧制高校の教育は、世界的な視野にもとづいた国際的精神と科学的精神を重視していたのである。これらは明治政府の西洋化・近代化政策（西欧の近代学問を輸入する政策）に沿ったものである。当時の高校生や大学生は、外国語の読み書きの能力が高かった。渡部（1990）は、「外国語重視のカリキュラムは西欧近代学問移入にとって不可欠のものであった。それは日本におけるリベラリズムの基盤にもなった。」と述べている。大正デモクラシー期に、一高校長の新渡戸稲造がキリスト教にもとづく国際主義の教育をおこなって、一高の学生に大きな影響を与えたが、その下地として明治時代からの国際的精神の教育の成果があったからである。国際的精神といっても、西洋中心で、西欧に追いつけ追い越せという受容型にすぎないものではあったが、鎖国時代から50年で世界の先進国へと登りつめた（1920年の国際連盟で「５大国」となった）のも、こうした国際的精神の教育の成果であろう。

また、科学的精神を徹底的に学んだことで、ものごとの分析的・整合的な科学的態度が養われたであろう。

国が定めた教育制度は、ともすればナショナリズムに偏りがちになるものだが、旧制高校は世界的な視野にもとづいた先進的なグローバリズム教育をおこなっていた。これによって、世界的な視野を持つ高度な人材を生んだ。世界史的にみても珍しいことであり、これも旧制高校の世界史的な意義のひとつであろう。

６－６．少人数の人格形成教育

少人数の人格形成教育

旧制高校	現在の教養学部
少人数教育	マスプロ授業
人格形成教育	知識の伝達
寮生活を通した人格的指導	接触は授業のみ

10

旧制高校では、１クラス40名であり、当時としては少人数教育であった。クラス担任の教師は、単に教科の指導だけでなく、人格的指導もおこなった。人生の先輩として学生と接し、人生の教師（生き方のモデル）となった。学生は寮で寝泊まりしていたので、教師は生活を通して個人指導をおこなうことができた。

旧制高校に対して、政府はお金をかけて豊かな教育環境を整備した。一握りの優秀な16歳～20歳の若者に対して、多くの教員が配置された。こうして少人数教育が達成され、教員との人間的交流も深まった。

後述のように、高等学校に進む人は、同年齢人口の0.5%しかいなかったので、少人数教育が可能だった。小人数クラスという環境は、よい教育に必要な条件である。

新しく高等学校を作る時には、校長には、当時の教育界のスターが任命された。その校長は、全国から優秀な教員を引き抜いた。旧制高校の教員は異動が多かった。教員には優秀な人が多く、各校に名物教師がいた。北杜夫『どくとるマンボウ青春記』（後述）には、旧制高校の教員についての記述も多く、①名物教師、②お殿様教師、③奇人教師などが描かれていて面白い。

７．旧制高校生のメンタリティ　　主体性と全寮制の実験

＜目次＞
７－１．全寮制
７－２．寮と自治の精神
７－３．学生が主体的に読書や議論に取り組んだ
７－４．スポーツの普及
７－５．バンカラ
７－６．エリート意識
７－７．バンカラ意識とエリート意識の共存

旧制高校の学生たちには独特のメンタリティ（精神性）が形成された。これが旧制高校の大きな特徴であり、面白いところである。

７－１．全寮制

多くの旧制高校は全寮制を取り（例外もあるが）、学生は学寮に住んで教育を受けた。

寮は単に寝泊まりするだけの宿舎なのではなかった。寮は人格形成のための教育の場として機能した。16～20歳の多感な時期の学生たちが、家庭や社会の影響から隔離されて、勉強に集中できた。同年齢者との生活は、競争意識やライバル心を生み、生活のいろいろな側面（勉強、スポーツ、恋愛、趣味など）において、互いに切磋琢磨した。学生たちは自らの人生と向き合い、青春を謳歌した。寮祭や寮対抗競技、学校対抗スポーツ競技などの行事の中で、仲間意識が形成された。その中で、一生のつきあいとなる親友ができた。

学校のクラス（学級）は同年齢集団であるが、寮は、先輩や後輩もいる異年齢集団である。寮の中では、同級生だけでなく、先輩・後輩や教官といった人間関係を通して、学生は強烈な人格的影響を受けた。

さらに、次に述べるように、寮は、自治を通して、人格形成をおこなう社会教育の場でもあった。

ザコ寝の寮生活

寮の寝室と不時点検　　1913年(大正２年)

枕を並べて寝ている学生

出典：第一高等学校ホームページ

当時の学生はどんな寮生活を送っていたのだろうか。

この写真は、1913（大正２）年の第一高等学校の寮の寝室である。今からほぼ100年前である。

丸刈りの学生が５人、おとなしく寝ている。文字通り枕を並べて寝ていた。うす汚れたせんべい布団である。後ろの棚には、私物を入れるこおりや衣類が無造作に置かれている。壁は木造である。屋根の傾斜がそのまま見えている。まるで屋根裏の物置きのような部屋で寝ていた。

これが当時の日本のエリートの姿であった。貧しい時代の青春である。

寮では無断外泊には厳しく、「不時点検」という見回りがあった。これも学生の自治のあらわれである。この写真はその時のものである。よく見ると、点検役の学生が右側に立っている。ベッドより一段低くなった床で、２人の学生が、提灯をもって見回り、学生のリストをチェックしている。学生帽をかぶり、ひとりは学生服を着ており、もうひとりは袴をはいている。学生からしたら、まるで監獄のような管理主義である。プライバシーが全くない。しかし、このような環境だからこそ、彼らは一生涯続く親友を作ることができたのである。

私がこの写真をはじめて見た時、そのザコ寝の集団生活と、貧しさにとても驚いた。これが当時の「エリート」であった。私が旧制高校に関心を引き寄せられたのは、この写真のインパクトであったといっても過言ではない。

その後、教養学部の現代教育論の授業で旧制高校の話をする時に、この写真を見せたが、学生たちが最も驚くのもこの写真である。今の時代からは考えられない。これほどプライバシーのない生活に今の学生は耐えられるだろうか。ちょうど中学・高校の修学旅行のザコ寝のような生活を、旧制高校生たちは３年間続けた。

７－２．寮と自治の精神

全寮制の始まりは、1890（明治23）年に、第一高等学校の木下廣次校長が、全寮制を敷いて、入学した学生全員に寮生活をさせたことにある。木下は寮の管理を学生に任せ、自治の空間とした。それまで地方出身者のための寄宿舎にすぎなかった寮は、ただの寝泊まりの場ではなく、社会的・人格的教育の場となった。その後、学生自治の全寮制が全国の高等学校にも広まった。

全寮制を作ったのは一高の木下廣次校長

木下廣次（1851～1910年）は、フランスで学位をとった法学者で、1883年から東京大学法学部教授をつとめ、1889年から兼任で第一高等学校の校長となった。木下は、４年間校長を務め、1893年に退任した。のちには京都帝国大学初代総長をつとめるなど、明治時代の高等教育の土台作りをした人である。

木下校長は、1990年、一高の４つの寮が完成すると、全寮制（皆寄宿制）を決め、入学生全員が寮で生活することとした。

そして「寄宿寮規程」を制定した。これは自重、親愛、辞譲、清潔の４つをめざすもので、４綱領と呼ばれ、学生寮に完全な「自治」を与えるものであった。 つまり立法機関としての「総代会」、行政機関としての「寄宿寮委員会」、司法機関としての「懲罰委員会」を作り、すべて生徒の自主運営に任せたのである。こうした自治制度は、当時の学校では画期的なことであった。もし、ある学生が、寮生の懲罰委員会から「退寮」と決定されると、それは高校からの退学を意味した（実際はそこまで厳しくはなかったようだが）。

また、木下校長は、学生に対して寮での「**籠城主義**」をとなえた。これは「わい雑な世俗に背を向けて、籠城の覚悟を持て」とするもので、学生に大きな影響を与えた。後述の寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』は、まさに籠城主義をあらわしている。

寮自治の実験

寮の管理を学生の自治に任せることは、当時の国立学校としては、「実験」以外の何ものでもなかった。もし失敗したらどんな方向に向かったかわからない。「放任」となって無秩序状態に陥ったかもしれないし、政治や宗教の団体に乗っ取られるリスクもあった。木下校長も、最初のうちは綱渡りのような日々だっただろう。この実験がうまくいったので、学生の自治の精神や自主的な生活意欲が培われた。木下校長の大英断というべきであろう。

全寮制と自治の精神

全寮制は、その後、全国の高等学校に広がった。各校には「校風」という個性が生まれた。例えば、一高では「自治」、二高では「雄大剛健」、三高では「自由」、四高では「超然」、五高では「剛毅朴訥」といった具合である。

また、旧制高校全体に共通する校風もあり、それは「自治」の精神であった（旧制高等学校資料保存会、1981）。自治の精神は全寮制という制度から生まれたものであった。寮の自治の精神によって、旧制高校の学生は、主体的な意欲を強く持ち続けた。

また、自治の精神によって、社会や政治に背を向けることなく、社会性を持ち得た。渡部（1990）は次のように指摘する。

「藤村操の煩悶自殺や徳冨蘆花の謀反論演説、学生社会科運動、軍事教練反対・校長排斥等を掲げた同盟休校など、社会の動向に敏感に反応し得たのも「自由と自治」の精神があったからである。」

集団主義のエリート教育の実験

木下廣次校長の全寮制や籠城主義は、集団主義によるエリート教育が可能かどうかという教育の「実験」でもあった。

西洋のエリート教育は、個人のエリート意識を育てるものであるが、旧制高校の全寮制は集団によってエリート意識を育てる試みであった。他に例をみないユニークな制度であり、木下の実験といってもよいだろう。

例えば、士官学校などでも集団主義が利用されるが、それは上から強制される集団主義である。これに対し、旧制高校は学生の自治に任せた下からの集団主義であり、集団の質は全く違う。また育てる人材も全く違う。

この木下の実験は成功したといえる。全寮制を体験した旧制高校生の多くが、寮生活を高く評価している。また、自治の全寮制が、日本全国の旧制高校に採用されたことも、実験の成功を示している。

全寮制の世界教育史的意義

学寮制は、オクスフォード大学やケンブリッジ大学などイギリスで発達したが、その起源はキリスト教の修道院にあった（丹野、2012）。

日本の旧制高校は、宗教的な理由や、単なる宿舎の確保という理由ではなく、教育思想（自治、籠城主義、集団主義のエリート教育）や学生の指導と管理の理由から全寮制を取り入れた。これも世界的に例を見ないことである。

また、日本全国の旧制高校において全寮制が採用されたということも、世界的に見て珍しいと言えるだろう。

校友会と自治活動

寮の自治とともに、旧制高校の自治の中心となったのは、校友会の活動であった。

校友会は、全校生徒による自治組織である。旧制高校の学生は、校友会活動を通じて、自由に自主的に訓練をつみ、教養を高め、自己の意志にもとづいて人間形成をおこなった。

校友会活動は、運動部と文化部に分けられる。運動部は、結果よりも練習の過程を重視し、スポーツを通して、自己形成に資する精神的な「何か」を得ようとする傾向があった。

また、運動部の活動は啓蒙的な役割を果たした。後述のように、旧制高校生は早くから野球・テニス・ボートなどの欧米のスポーツを取り入れ、その後、それらは全国に広まっていった。

文化部は、思想研究、文芸創作、芸術活動の領域で活発な活動をおこなった。教室の授業の範囲を超えて、自らの考えや教養を深めていった。そのよい例を次に述べる倉田百三に見ることができる。

参考：旧制高等学校資料保存会編（1984）資料集成 旧制高等学校全書第７巻 生活・教養編（２）.昭和出版.

７－３．学生が主体的に読書や議論に取り組んだ

旧制高校の学生は、大学受験の圧力がなかったので、かなり自由に勉強できた。前述のように、高等学校への入学試験はかなり厳しかった（競争率５倍）けれども、大学入試はユルかった。大学の定員は、高等学校の定員とほぼ同じだったので、卒業後、大学や学部を選ばなければ、ほぼ全員がどこかの大学に進むことができた。大学への進学が保証されていたので、大学入試のための「つめこみ勉強」をしなくてすんだ。

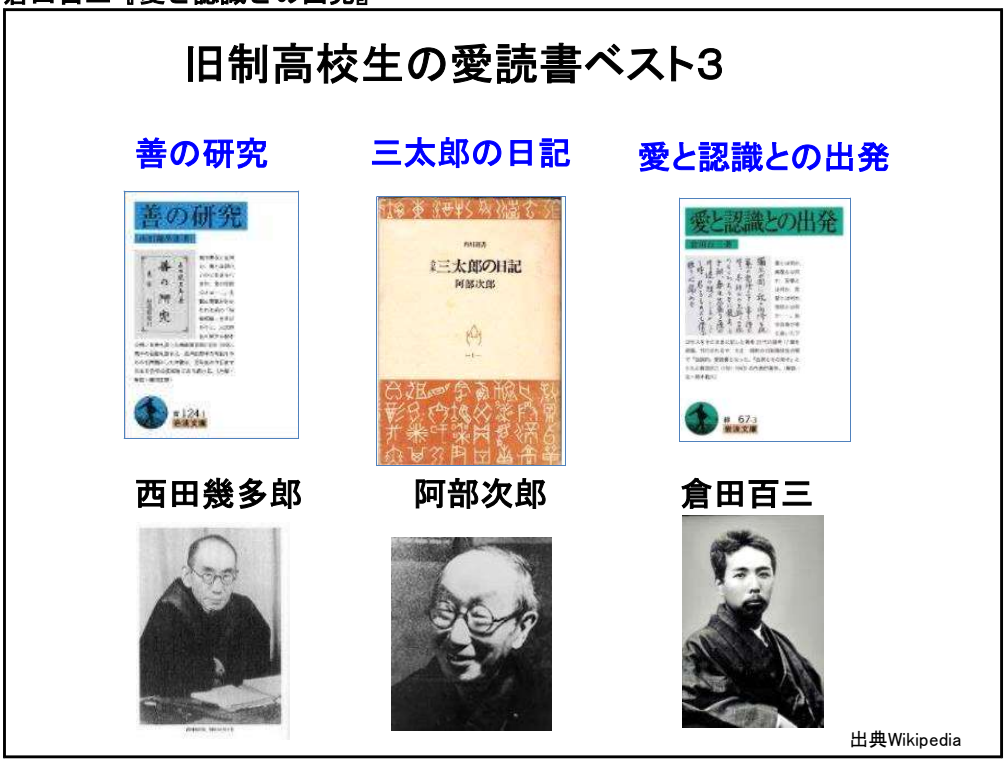
第一高等学校の校長をつとめた天野貞祐は次のようにいう。「高校教育について第一に考えられることは年令である。十七歳から二十歳という漸く自己の実存にめざめ、しかも純真な情操をもつ時期の主体が教育の対象であることはその重要な契機をなすものである。第二に、職業と直接せず、職業意識に累わされないことが自己目的性の会得に適している。第三に、高校生たる矜持がかれらを自重せしめる。第四に、高校教育のもつ人文的性格と、加うるにさまざまな志望をもつ生徒の集団であることが、また重要な契機である」筧田（1976）より引用。

旧制高校の学生は、文科も理科も、西洋の哲学書を読んで議論した。「デカンショ節」（デカルト、カント、ショーペンハウエル）がはやった。

哲学は、知識や教養を増やすためではなく、自分の「生き方」を考えるためのものであった。学生は、試験のための勉強といった外発的動機ではなく、主体的な内発的動機から西洋哲学に取り組んだ。旧制高校だけがそうだったのである。当時の日本では、旧制高校以外の学校は、「つめこみ型」の一方的な授業に終わった。

このように学生が自主的・主体的に読書や議論に取り組んだ国立学校というのは、世界的にも珍しいものである。

倉田百三『愛と認識との出発』



旧制高校生の主体的な読書や議論の実例として、倉田百三『愛と認識との出発』をとりあげてみよう。この本は、西田幾多郎『善の研究』、阿部次郎『三太郎の日記』とともに、旧制高校生の３大愛読書と呼ばれた。

倉田百三（1891～1943年）は、広島県に生まれ、1910（明治43）年９月に第一高等学校（以下、一高と略）の文科に進んだ。当時の校長は新渡戸稲造である。同学年には、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛、矢内原忠雄などがいた。倉田は、はじめは成績も良く、弁論部と文芸部に所属し、一高の校友会誌に文章を発表した。しかし、自由すぎる生活をして長期欠席したり、恋愛にのめり込み、失恋して放浪したりして、落第した。さらに、結核を発病し、入院生活を余儀なくされ、ついに1913（大正２）年には一高を退学せざるをえなくなった。それで自殺まで考えたりするなど、疾風怒濤の学生時代を送った。

『愛と認識との出発』は、1921（大正10）年、倉田百三が30歳の時に出版されたが、主な部分は一高時代に書かれたものである。倉田の思想的な煩悶や希望、恋愛や失恋が生のままに語られている。思想的で難解な本ではあるが、私小説ないし告白小説でもあり、当時の旧制高校生は、この本に等身大の自分を見出した。また、この書によって、西田幾多郎の『善の研究』が発見された点でも意義が大きい。

『愛と認識との出発』を読むと、当時の旧制高校生が、いかに西洋哲学を読んでいて、その知識があったことがわかる。デカルト、カント、ショーペンハウエル、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル、スピノザなどが当たり前のように出てきて、よく読んでいたことがわかる。また、倉田百三は心理学や倫理学もよく勉強していた。

『愛と認識との出発』は、17本の作品からなるが、そのうち冒頭の５本は一高時代のものであり、一高の校友会誌に発表された。この冒頭の５本が『愛と認識との出発』のコアの部分といってよい。以下では、一高の校友会誌に発表された３本の作品をとりあげてみよう。これらは当時の校友会の活動の実際も示してくれる。

①「異性の内に自己を見出さんとする心」

冒頭では倉田の煩悶が描かれる。以下、青字は作品からの引用である（下線は筆者による）。

その頃の私は唯心論の底に心を潜ませていた。私は･･･他人の存在を認めることができなかった。私は唯心論から**唯我論**に陥ってしまった。私はエゴイストであるよりほかはなかった。その立場より対人関係の問題を覗く

とき、究極は個人主義を透して、極端なる利己主義に終わらざるを得なかった。かくて極端なる利己主義者となった。それもショウペンハウエルの底気味悪き思想を潜りて出でたる戦闘的態度の利己主義であった。
　しかし、利己主義・エゴイズムに立つと、他者との関係が不可能になる。とくに親友との友情を否定し、孤独になってしまった。さらに恋愛も不可能となる。この矛盾が倉田を苦しめ、行き詰まっていたのである。
　こうしたある日、倉田は突然『善の研究』と出会ったのである。以下は、有名な出会いの描写である。
　ある日、私はあてなきさまよいの帰りを本屋に寄って、青黒い表紙の書物を一冊買ってきた。その著者の名は私には全く未知であった。それは『善の研究』であった。私は何心なくその序文を読みはじめた。しばらくして私の瞳は活字の上に釘付けにされた。
　見よ！
　個人あって経験あるにあらず、経験あって個人あるのである。個人的区別よりも経験が根本的であるといふ考から独我論を脱することが出来た。
とありありと鮮やかに活字に書いてあるではないか。独我論を脱することができた？！　この数文字が私の網膜に焦げつくほどに強く映った。
　私は心臓の鼓動が止まるかと思った。私は喜びでもない悲しみでもない一種の静的な緊張に胸がいっぱいになった。涙がひとりでに頬を伝わった。
　静かな田圃に向かった小さな家にこもり、私はこの家で『善の研究』を熟読した。この書物は私の内部生活にとって天変地異であった。この書物は私の認識論を根本的に変化させた。そして私に愛と宗教との形而上学的な思想を注ぎ込んだ。私はO市の冬ごもりの間に思想を一変してしまった。春が来た。私は再び上京した。
　倉田百三が『愛と認識との出発』で紹介したことによって、西田幾多郎の『善の研究』が世に発見された。『善の研究』は1911年に出版されたが、すぐに絶版になり、忘れ去られた。10年後、倉田の『愛と認識との出発』が出版されると、旧制高校生の間で『善の研究』が評判になり、ベストセラーとなり、西田のリバイバルがおこったのである。もし、倉田の本が出なかったら、『善の研究』が若者から読まれることはなかっただろう。
　「異性の内に自己を見出さんとする心」の後半は、一転して恋愛の話になる。倉田の妹の日本女子大学の友人であった逸見久子との恋愛が描かれている。
　独我論（利己主義・エゴイズム）によって不可能となっていた恋愛が可能となったのは、やはり西田幾多郎の『善の研究』のおかげである。倉田は、西田哲学の「愛と認識の合一」の説に救われた。これによって、友情や恋愛といった対人関係が肯定されたからである。
　愛の源流は何であるか。それは認識である。認識を透して、高められたる愛こそ生命のまことの力であり、熱であり、光である。
　私は自己の個人意識を最も根本的なる絶対の実在として疑わなかった。自己がまず存在してもろもろの経験はその後に生ずるものと思っていた。しかしながらこの認識論は全く誤謬であった。私のいっさいの惑乱と苦悶とはその病根をこの誤謬のなかに宿していたのであった。実在の最も原始的なる状態は個人意識ではない。それは独立自全なる一つの自然現象である。
　愛と認識とは別種の精神作用ではない。認識の究極の目的はただちに愛の最終の目的である。私らは愛するがためには知らねばならず、知るがためには愛しなければならない。自他合一の心こそ愛である。
　西田幾多郎の『善の研究』が倉田百三にいかに大きな人生的影響を与えたかがわかる。それは、当時の旧制高校生への影響の大きさをも示しているだろう。

②「自然児として生きよ　－Ｙ君にあたう」
　副題のＹ君とは矢内原忠雄のことであり、この作品は倉田が矢内原を一方的に批判した文章である。矢内原忠雄（1893～1961年）は、一高時代に新渡戸稲造校長の影響を受け、学者としても後継者となり、のちに東京大学総長をつとめた人物である。
　倉田と矢内原は同じ年に一高に入学し、同じ弁論部に所属しライバル関係にあった。1913年に、一高の全寮茶話会において、矢内原は卒業生の総代として演説した。矢内原は当時から優等生であり、一高生のリーダー的存在だった。その矢内原の演説を、２回落第していた倉田は在校生の側で聞き、反感を持った。そこで矢内原をこき下ろす文章を書いて一高校友会誌に発表したのである。
　矢内原よ、あなたには内省力がない、常識的すぎる、型にはまった固い考え方しかできない、感傷主義にすぎない、生活意識がない、自信が強すぎる、強引に伝道しすぎる、人間味が乏しい、声が大きすぎる。
　矢内原よ、私（倉田）はあなたに忠告する。もっと深く内省せよ。もっと思索せよ。心の目をもっと深く、鋭く、裸にして人生を眺めよ、常識を捨てたまえ！　「あなたが新渡戸先生の宗教に赴かれないで、ドストエフスキーの宗教に入られることを切望する。」
　こうした個人的批判を堂々と一高校友会誌に発表したのは驚きである。当時の旧制高校ではこうした議論が公然とおこなわれる雰囲気だったのだろう。旧制高校の弁論の実態を示す良い例である。
　倉田の批判は、明らかに優等生の矢内原への嫉妬という個人的感情は入っているが、ただそれだけではなく、当時の一高をめぐる思想状況への批判も含まれている。
　新渡戸校長は、札幌農学校時代からの親友である内村鑑三を一高の嘱託教員に呼んだ（これが後の不敬事件を引き起こす）。これにより、矢内原や南原繁など多くの高校生がキリスト教の信仰を持った。倉田は、こうした流行にしたがって信仰を持つような学生を批判する。
　倉田のキリスト教批判の奥には、新渡戸校長の思想への批判がある。新渡戸は、キリスト教にもとづいた人格主義教育をおこなった。これが一高生に大きな影響を与え、「国粋主義」に対抗する「国際主義」を一高生に広めた。阿部次郎や和辻哲郎、河合栄治郎など多くの学生に影響を与え、大正デモクラシーに寄与した。ただ、その一方で、新渡戸のキリスト教的・国際主義的な思想に反発する学生も多く、倉田もそうしたひとりであった。矢内原と倉田は、新渡戸稲造に対する当時の学生の両極の反応を代表している。
　倉田からケンカを売られた矢内原の反応は面白い。矢内原忠雄は当時の日記に、次のように書いたという。「倉田君から批判を受けて、私は最も感謝してこれを読んだ。私は戦慄して、批判された点を慎み、あくまで謙虚にならなければならない。倉田君は私の恩人である。倉田君に手紙を書いた。」矢内原の手紙は倉田に感動を与えた。矢内原の反応はあっぱれとしか言いようがない。この勝負、私は矢内原に軍配を上げたい。
　この作品には、倉田と矢内原の心のドラマが描かれており、当時の旧制高校生の議論の雰囲気やメンタリティが感じられる。

③「恋を失うたものの歩む道： 愛と認識との出発」

倉田百三は逸見久子との恋愛に溺れて落第した。しかし、恋愛はうまくいかなかった。故郷に帰っていた相手から、突然、「母親の命令で他に嫁することになった」という絶縁状が送られてきた。

おまけに結核が悪化して、故郷に帰り、療養を余儀なくされた。それだけではない。病気が重かったためか、一高を退学になった。半年ほどの間に、失恋と肺結核と退校という三重苦である。倉田は自殺まで考えた。それにしても、「恋を失うたものの歩む道」というタイトルは、何と切ないものであろうか。

しかし、希望も見えてくる。宗教的なる生命感がわいてきて、そこに希望を託した。ここでも倉田を救ったのは、西田幾多郎の哲学であった。愛には利己的な愛とそうでない愛がある。利己的な愛とはエゴイスティックなものであり、男女の性愛や、親の子に対する愛が含まれる。これらは倉田を絶望に追いつめた愛である。倉田を救ったのは、西田幾多郎の『善の研究』に描かれた愛である。「真の愛は『善の研究』の著者が説くごとき認識的キリスト教的愛である。」

本書のタイトルの「愛と認識」というのは西田哲学の用語である。

シケプリから生まれた『善の研究』

西田幾多郎の『善の研究』（1911年）は、日本人による最初の哲学書として評価が高いが、旧制高校から生まれた作品である。

西田幾多郎（1870～1945年）は、石川県に生まれ、前半生は苦労の連続であった。第四高等中学校で学んだが、学校と対立して中退し、東京帝国大学の選科で学んだ。苦労して30歳で第四高等学校の教授となった。四高の授業から生まれたのが『善の研究』である。その経緯も面白い。西田の哲学・心理学・倫理学の授業は難解で、学生には理解できなかった。そこである学生が「先生の講義の草稿を貸してほしい」と頼んだ。西田が貸すと、学生はそれを印刷して友人に配り、学生たちはそれで勉強した。いわゆるシケプリ（試験対策プリント）である。いかにも学生が考えそうな試験対策であるが、それに乗った西田も偉い。そして、学生は西田にその論文を「哲学雑誌」に投稿することを勧め、西田は印刷した草稿を投稿し、掲載された。それがきっかけで『善の研究』は出版に至った。この学生ももっと偉い。旧制高校の教員と学生の良好な人間関係を示すエピソードである。

このように『善の研究』は、もともと第四高等学校での授業として準備されたものだった。難解ではあるものの、専門家向けの論文ではなく、人生論的・人格主義的な内容であり、だから旧制高校生や一般の人々に読まれるようになったのである。

『善の研究』は、第１編「純粋経験」、第２編「実在」、第３編「善」、第４編「宗教」という構成である。第１・２編は哲学（認識論）、第３編は倫理学、第４編は宗教論となっており、哲学のおもな領域を横断して統一する考え方を述べている。単なる哲学書でもなく、単なる倫理学書でもなく、単なる宗教論書でもなく、それらを統合したひとつの人格的な考え方を述べている。『善の研究』にはすべてがある。専門家向きの論文ではなく、「いかに生きるべきか」という人生論の問いに答えるものであった。そうした点が倉田百三の心を打った。西田幾多郎の哲学は、倉田の哲学を変え、人生観を変え、友情と恋愛に哲学的根拠を与えた。そうした人格的・人生論的なところが、倉田だけでなく、旧制高校生の愛読書となった理由だろう。

西田幾多郎は、その後、京都帝国大学の哲学科の教授となり、田辺元や三木清などの哲学者を育てた。

７－４．スポーツに力を入れ、社会への普及に貢献

旧制高校では、校友会活動としての運動競技が盛んであった。校友会の運動部は、結果よりも練習の過程を重視し、スポーツを通して、自己形成につとめた。各校のキャンパスには、立派なスポーツ施設が作られた。

対抗戦とインターハイ

校友会の運動部は、外部との対抗戦で発展した。

まず、個別の競技で、高校どうしの対抗戦がさかんとなった。例えば、一高 対 三高（現在の東京大学 対 京都大学）の定期戦は、明治39年の野球戦に始まり、その後、テニス・陸上競技・水上競技・漕艇を加えて、昭和23年まで続けられた。ほかにも、兄弟校である四校 対 八高（金沢大学 対 名古屋大学）、五高 対 七高（熊本大学 対 鹿児島大学）などの定期戦が知られている。

その後、大正末期頃から、全高校を集めて優勝校を決める「インターハイ」が組織されるようなった。インターハイとはインターハイスクールの略称である。競技種目別におこなわれるようになり、次の21種目が記録されている。柔道、剣道、弓道、陸上競技、水上競技、漕艇、野球、テニス、バスケットボール、卓球、バレーボール、サッカー、ラグビー、ホッケー、射撃、馬術、スケート、スキー、ハンドボール、ヨット、相撲。

戦争中には中断され、戦後に復活した。インターハイによって、スポーツは旧制高校に定着した。

参考：旧制高等学校資料保存会編（1984）資料集成 旧制高等学校全書 第７巻 生活・教養編（２）、昭和出版.

スポーツ発祥の地としての旧制高校

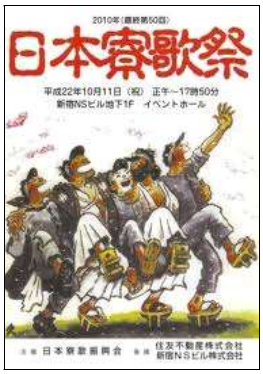
校友会の活動は啓蒙的な役割を果たした。運動面では、帝国大学とともに、早くから野球・テニス・ボートなどの欧米のスポーツを取り入れ、その後、それらは全国に広まっていった。

例えば、東京の神田の学士会館の北側に「日本野球発祥地」の碑がある。日本における野球の始まりは、開成学校のアメリカ人教師ホーレス・ウィルソンが生徒たちに野球の指導をしたことによる。野球は、開成学校からその予科だった東京英語学校(後に大学予備門、第一高等学校)などに伝わり、やがて全国的に広まっていった。

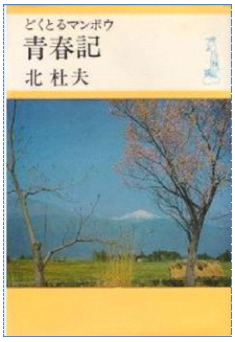
また、例えば、仙台の東北大学川内キャンパスの近くに、五色沼があるが、ここは第二高等学校の生徒がドイツ人教師からスケートを教わったところであり、「近代フィギュアスケート発祥の地」の説明板が立っている。地下鉄では東西線国際センター駅の近くである。この駅前には、フィギュアスケートのオリンピック金メダリストの荒川静香と羽生結弦の写真も飾られている。

７－５．バンカラ

バンカラ意識　優等生の不良化



北杜夫
「どくとるマンボウ青春記」



旧制高校生の特徴をあらわすものとして有名なのは「バンカラ」であろう。バンカラとは、西洋風で洗練された「ハイカラ」に対抗して、野蛮で粗野な言動をさす。汚い学生服と破れた学生帽をかぶり、徒党を組んで大声で騒いで闊歩するイメージである。

旧制高校での生活をよく描いたものに北杜夫『どくとるマンボウ青春記』（1968）がある。作家の北杜夫が旧制松本高校での自分の体験を描いたエッセイである。

松本高校の学生は全員が寮で生活している。徹夜で人生論を語りあかし、その議論に負けないために、哲学書を読んで準備する。インターハイや、寮祭で、エネルギーを使い果たす。寮同士でストームをかけ合ってさわぐ。

「ストーム」とは、バンカラの代表で、おもに学生寮の中でおこなわる馬鹿騒ぎである。真夜中に大声で寮歌やデカンショ節などを歌いながら、大勢で肩を組んで廊下を歩き、部屋で寝ている者を叩き起こして回るといった行為である。各校で共通にみられたストームには次のものがあった。

歓迎ストーム（新入生に対し、時には新任の校長、舎監、他高校からの来校者に対し）
返礼ストーム（新入生が歓迎ストームに対し）
送別ストーム（卒業生に対し）
街頭ストーム
ファイアー・ストーム
祝勝ストーム
説教ストーム

出典：旧制高等学校資料保存会（1983）『旧制高等学校全書　第6巻 生活・教養編（1)』昭和出版.

高校は男子ばかりで、女子学生はいない。寮の部屋は不潔でゴミだらけ。階上からは「寮雨」が降ってくる。「寮雨」とは、空から降ってくる自然の雨ではなく、横着な男子学生が窓から降らせる人工的な雨である。寮の１階の住人は決して窓を開けなかった。

旧制一高の寮を受け継いだ東京大学駒場寮も不潔でゴミだらけだった。1973年に入学して上京した私は、下宿が見つからなかったので、キャンパス内にあった駒場寮を候補として見に行った。学生運動の牙城ともなっていて、とても地方から出てきた学生が安心して住める場所ではなかったが、それ以上に、寮の部屋が不潔で暗いことから恐怖を感じた。部屋の床にはホコリが１センチも積もっていて、絨毯のようだった。あれから50年がたち、駒場寮はなくなったが、寮のホコリの強烈なイメージは残っていて、今でも夢の中に出てくるほどだ。

旧制高校と旧制大学はこんなに違う

北杜夫は松本高校から東北大学医学部に進み、『どくとるマンボウ青春記』には大学時代のことも描かれているが、高校と大学では全く印象が違う。高校時代は青春時代として生き生きと描かれているのに対し、大学時代は白けた大人の世界として描かれている。高校時代の自由さこそが忘れられなかったのである。高校時代は自由に読書と議論とバンカラで楽しんだのに、大学に進むと、きびしい専門教育が待っており、みんな孤立して冷めた大人の世界となる。

そういえば、夏目漱石の『三四郎』でも、「大学とは非常につまらないところだ」とちゃんと書かれている。

実際、寮歌や校歌についても、旧制高校のものは今でも愛唱されているのに対し、大学の校歌はほとんど知られていない。それほど高校と大学では好感度が違うのである。

７－６．エリート意識

以上のバンカラ意識は、単なる野蛮で粗野なものではなくて、実は「エリート意識」の裏返しである。

入学できるのは同年齢の0.5%のみ。

当時、高等学校に行ける人はエリートであった。例えば、1924（大正13年）をみてみよう。この年には、ほぼすべての旧制高校が設立し終わっている。この年の16歳の男女は約100万人であったのに対し、高等学校の１学年は約5,000人であった。つまり同年齢の0.5%だけが高等学校に進めたにすぎない。

また、この年の旧制高校への入学志願者は約30,000人であったのに対し、合格者は5,000人であり、競争率は６倍であった。入学試験の狭き門をくぐった合格者は、エリートとしてのプライドが高まったであろう。

出典：旧制高等学校資料保存会（1985）資料集成 旧制高等学校全書 第１巻 総説編．昭和出版．

授業料はそれほど高くない

ただ、授業料は思ったほど高いわけではない。

筧田(2011)によると、官立の一高の年額の授業料は、大正9（1920）年40円、大正14（1925）年65円、昭和4（1929）年80円である。下記の資料にも同じような資料がある。

出典：旧制高等学校資料保存会（1983）資料集成 旧制高等学校全書 第６巻　生活・教養編(１)．昭和出版．

大正9年（1920年）の授業料40円はどのくらいの価値なのだろうか。大正10（1921）年の１円の換算比をネットで調べてみると、現在の570円とか、1000円、2000円、4000円、7700円とかさまざまである。

最小値１円＝570円とすると、当時の40円は、現在の22000円である。

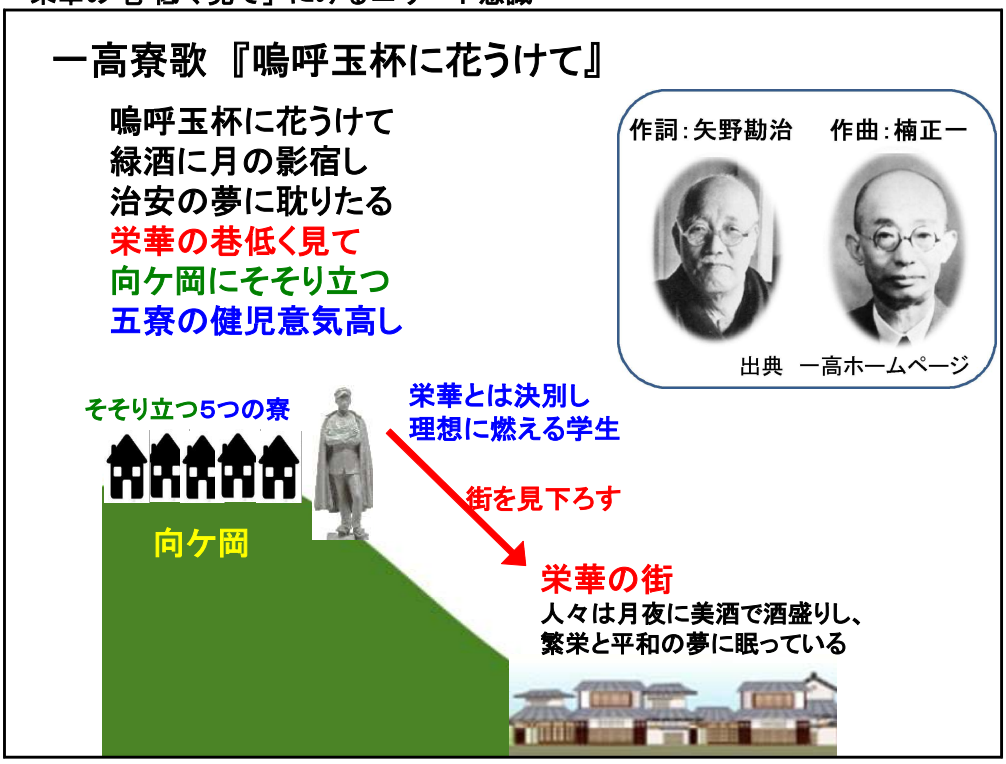
最大値１円＝7700円とすると、当時の40円は、現在の30万円である。

真ん中をとって、１円＝2000円とすると、当時の40円は、現在の8万円である。

現在の国立大学の授業料は年54万円であるから、これに比べると、当時としてもそれほど高いわけではない。授業料のほかにも寄宿寮費もあるので、親の負担は決して低くはないが、金持ちしか入れないというわけではなさそうである。

旧制高校は最先端の実験教育の施設であり、お金がかかったはずだが、費用は国が出していたようだ。

「栄華(えいが)の 巷(ちまた) 低く見て」にみるエリート意識



高校に入り、寮生活などを通してエリート主義はさらに強まっていったであろう。このエリート意識を、旧制一高の寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』にみてみよう。

この曲の作詞は矢野勘治、作曲は楠正一である。右上の写真は、晩年のものであり、この曲を作ったのは、ふたりが一高の学生の時だった。当時の学生のナマの感情がこの曲には出ているのである。

寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』
嗚呼玉杯に花うけて
緑酒に月の影宿し
治安の夢に耽りたる
栄華の巷低く見て
向ケ丘にそそり立つ
五寮の健児　意気高し

歌詞を図解してみると、左下の図のようになる。

向ヶ丘には、５つの寮がそそり立っている。ここに学生（健児)が住んでいる。

眼下には街があり、学生はそれを見下ろしている。

下にある俗世間では、酒の杯に月を写し、桜の花びらを杯にうけながら、繁栄を楽しんでいる。

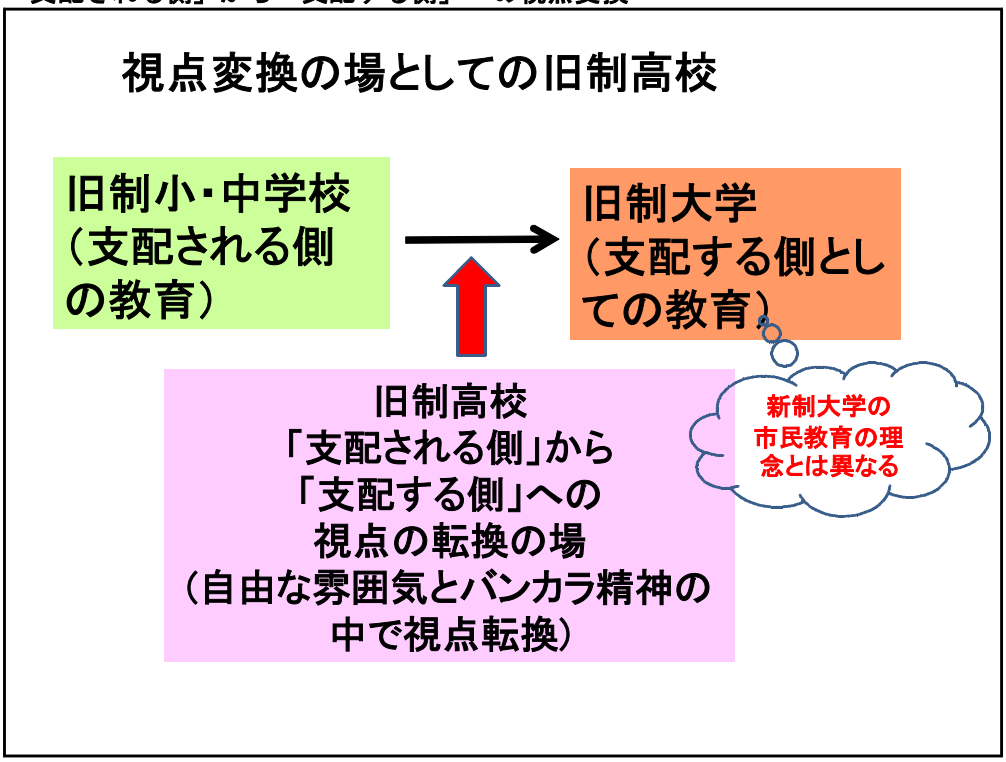
学生は、そうした繁栄の街を見下ろしながら、俗世間を超越しようと高い理想に燃えている。

エリートたらんとする一高生は、俗世間から超越しようとしている。「上から目線」のエリート主義ではある。
しかし、それは自分だけが経済的・社会的に得したいといった自己中心的なものではない。そうではなくて、俗世間の繁栄や快楽には背を向けて、理想主義を貫くという禁欲的なエリート主義である。当時の旧制高校生の心情がよくあらわれている。ここには、前述の木下校長の「籠城主義」があらわれている。
一高の当時の向丘キャンパスは、本郷台地の上にあるが、台地の下には根津の遊郭や歓楽街があった。この歌は、そうした俗世間から超然としているという意味もあった。この歌が一高生の心を捉えたのには、そうした地理的な理由もあるだろう。このような上からの心情と、下の街を見下ろせる向ヶ丘という場所はぴったり合うものだった。もし、逆に一高が谷底にあり、俗世間を見上げる地形であったら、このような「上から目線」のエリート主義の歌はできなかっただろうし、できたとしても、それほど一高生の心を捉えなかっただろう。
この歌詞で、緑酒を飲んでいるのは「健児」なのか「栄華の巷」なのかで論争がある（秦、2003）。玉杯で酒を飲んで意気軒昂なのは学生であるという意見と、そうではなくて、酒を飲んで繁栄と平和を楽しんでいるのは「栄華の巷」の社会のほうだという意見がある。なお、「緑酒」とは、緑色に澄んだ酒のことで、美酒をさす。一高生は16歳～20歳の未成年であり、飲酒は禁止されていた（隠れて飲んでいるバンカラも多かったが･･･）。だから、もし酒を飲んでいるのが学生だったとしたら、寮歌として許されなかっただろう。やはり、酒を飲んでいるのは「栄華の巷」のほうだろう。

７－７．バンカラ意識とエリート意識の共存

以上のように、旧制高校生の心には、熱いバンカラ意識と冷静なエリート意識という正反対のものが併存している。このことは、決して偶然なのではなく、旧制高校の根本にある精神構造をあらわしている。バンカラとは、「優等生の不良化」なのであり、単なる不良行為なのではない。

「支配される側」から「支配する側」への視点変換



戦前の小学校・中学校では、国から「支配される側」の教育がおこなわれており、一方、大学では、国の立場で「支配する側」としての教育が行われた。その境界にある旧制高校では、生徒の視点を「支配される側」から「支配する側」へと転換させる必要があった。そうした視点の転換装置として旧制高校が機能した。

支配される側の視点の解除（バンカラ意識）
第１段階として、「支配される側」の視点を解除する必要がある。
小学校・中学校では国から与えられた教育を一方的に受け入れる注入主義教育であった。これに対し、高等学校になると、学生の主体性を重んじた自由な教育方針や校風へと変わり、自発的な学習や学生の自治が要求されるようになる。
また、規則や道徳を逸脱するような自由な雰囲気が許容されることにより、支配される側の意識を解除しようとした。ストームという馬鹿騒ぎは、規則や礼儀にとらわれない雰囲気を作るために、いったんそれらを無視する儀式である。「ここまでしても何も言われない」ことを知って、それまでの規則や礼儀は相対化される。バンカラという野蛮な言動は、規則を逸脱することを強調することである。これによって支配される側の国民としての道徳が相対化され、解除される。その意味で、旧制高校のバンカラは、単なる流行や風俗ではなく、積極的な意味を持っていたと思われる。

支配する側の視点の注入（エリート意識）
さらに、第２段階として、「支配する側」の視点を注入する必要がある。
高等学校の入学試験の狭き門をくぐったことで、エリートのプライドは作られたであろうが、まだそれは無自

覚なものである。高校時代には、寮生活の自治を通して、前述の寮歌「栄華の巷低く見て」に見られるような禁欲的なエリート主義や「籠城主義」が注入される。こうして、大学へ進む頃には、自覚的な「支配する側の視点」が完成している。

たしかに、例えば川端康成の『伊豆の踊り子』を読んでも、主人公の第一高等学校の学生は、踊り子一家に代表される一般人を下に見ていて、そのエリート臭が鼻について不快なところがある。

視点変換の場としての旧制高校

第１段階と第２段階は、同時進行した。バンカラ意識とエリート意識という一見矛盾したメンタリティが併存したのもその表れである。バンカラとは、単なる非行行為なのではなく、「優等生の不良化」つまり「エリートになるための一時的な踏みはずし」である。バンカラ意識とエリート意識は、一見矛盾するように見えるが、実は同じメンタリティの裏と表である。こうして、３年間の高校生活の間に、学生は「支配される視点」を脱却し、「支配するエリート」の視点を獲得し、卒業して大学へと進む。旧制高校はこのような視点の転換装置であった。

戦後の日本の高等教育は、アメリカ的な「市民教育」という平等の理念に貫かれており、戦前のエリート養成という目的は排除された。

８．旧制高校の評価　　賞賛と限界

自治の精神や学生の主体的な取り組みなど、これまで旧制高校は高い評価を受けてきた。ただ、賛否両論であったことも事実である。

旧制高校は戦前の教育の最高傑作である

旧制高校の教育を受けた人たちはみんな「よかった」という。第一高等学校の校長だった天野貞祐は次のように述べている（筧田、1982）。

「旧学制において、最も成功した教育が高校教育であったことは識者の一様に承認するところであろう。高校生活の体験者は異口同音に礼讃していう。寮生活はいかに楽しかりしことか、われらは高校において生涯の最も幸福な時期を持った。ひとり学問を学んだだけではなく生涯の友人も与えられた」

また、哲学者の下村寅太郎は、次のように言う（下村、1992）。

「僕は戦後の一番大きな失敗のひとつは、旧制高校の廃止だと思う。あれは明治の教育の一番の傑作だったと思う。旧制高校は、まだ目的が決まらず、あの３年間でゆっくりと自分の将来を考えるからね。そこでみんな無目的の読書をした。哲学の本なんかまで」

日本社会にもたらした影響

戦前、戦後の日本の指導者の多くは旧制高校で学んでいる。旧制高校において、同じ釜の飯を食べた学生たちは友情を深め、それが一生の仲間となった。その後、大学に進み、各界の指導者となり、高校時代の友情がもとになってエリート集団が形成された。彼らは、戦前に軍部の突出を抑えられず、間接的に戦争に突入させたという責任もある。ただ、それと同時に、戦後の復興や戦後民主主義を支えたのも旧制高校の出身者である。

世界的には、イギリスのオクスフォードやケンブリッジの学寮（カレッジ）の中に、同じようなエリート集団形成がある。

旧制高校の限界と批判

旧制高校の教育については賛否両論があることも事実である。筧田（1982）は、「旧制高校への賛成意見はその教育を受けた人々だけに限られている」として、次のような批判的意見を紹介している。

「生徒の個性や自主性を尊重した自由潤達な教育方針は、一握りのトップ・エリートの養成機関という、その特権的地位と無関係ではない。弊衣破帽のバンカラ風俗も同様の範疇であり、これを単純明快に教育のユートピア視し、理想の学校のようにいうのは当たらざるも甚しい」

「元来、日本の社会というのは、 さむらいという特権階級が百年前のついこのあいだまで存在して、われわれ町人というか、さむらいでない人間の上にエリートとして君臨しておった、どうも旧制高校の卒業生は、そういうさむらいの子孫であるような顔をすることがたびたびあったのではないか、私はむしろ旧制高校がなくなったのを喜ぶ」

同年齢の0.5%しか旧制高校に入れなかった

旧制高校がうまくいった理由は、学生の人数が少なかったからである。前述のように、高等学校に進む人は、同年齢人口の0.5%しかいなかった。少人数だったので、教師との人格的接触も持てたし、全寮制が可能だった。小人数クラスという環境は、よい教育に必要な条件である。

ちなみに、旧制一高のキャンパスは、今の東京大学教養学部の駒場キャンパスであるが、同じ敷地面積なのに、旧制一高は１学年350名だったが、今の教養学部は１学年3500名であり10倍になっている。その結果、マスプロ授業になっている。こうした状況は今のどの大学でも同じである。今のような大衆化した大学において、旧制高校のような教育（少人数授業や全寮制）をおこなうことは不可能である。

最初に述べたように、旧制高校は、世界レベルにおける高等教育の「実験」であった。そのために、お金をかけて、豊かな教育環境が整備された。これほど恵まれていたのも、「実験」であったからである。そうした恵まれた環境でのびのびと生活した学生たちが、それを高く評価するのは当然かもしれない。しかし、同年齢の残りの99.5%の人は、粗末な教育環境しか与えられなかった。

いくら旧制高校の教育がうまくいっていたからといって、今の日本にそのまま復活させても意味はないし、不可能である。第１に、戦後の教育制度は、平等の市民教育の理念に変わり、高等教育もエリートを育てる場所ではなくなったからである。旧制高校の教育方針を戦後の市民教育へと一般化することはできない。

第２に、財政的にもこれだけお金のかかる学校を全国に作ることは不可能である。

男子のみの高等教育

現在からみて、戦前の高等教育の最も大きな限界は、男子しか入学できず、女子には開かれていなかったことである（寺崎、1990）。

「大学そのものが女子に門戸を閉ざしていた戦前にあっては、大学予備教育機関に女子が進学することは許されず、高校も大学予科もすべて男子のためだけの学校だった。」

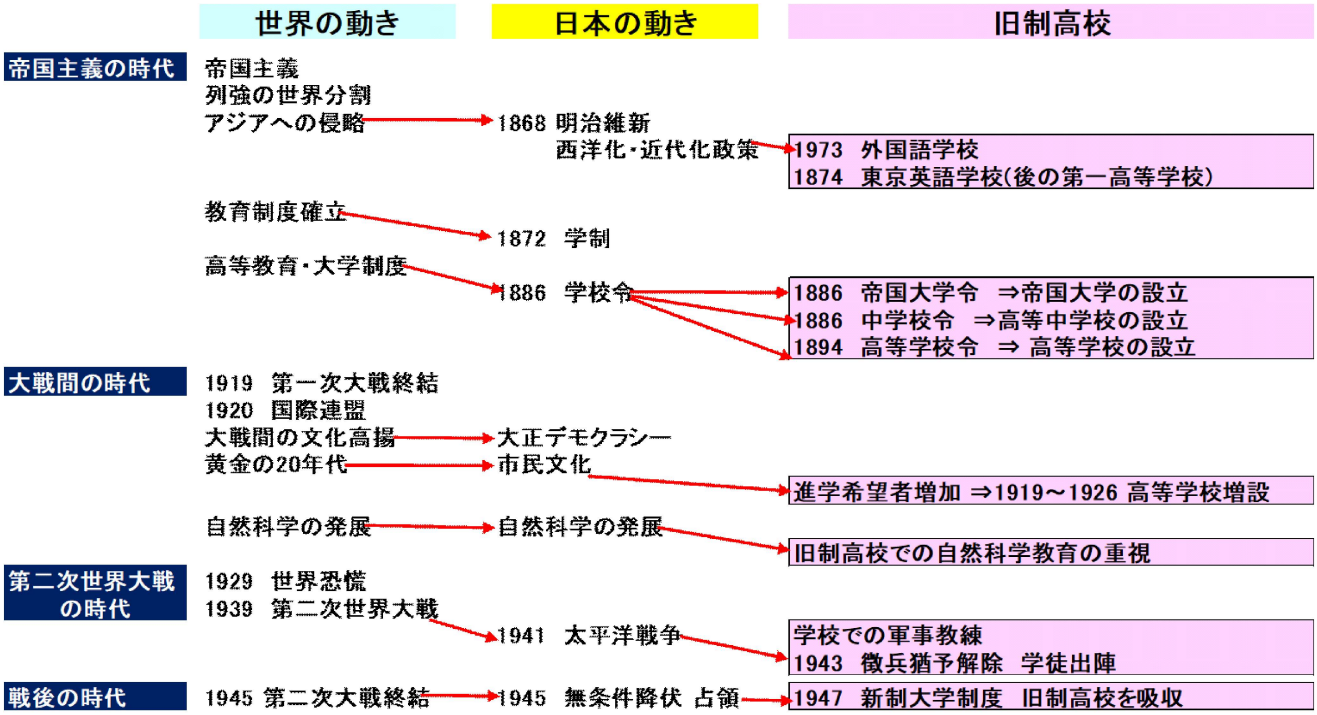
これは旧制高校だけでなく、旧制大学など戦前の高等教育全体に当てはまる限界である。

戦後すぐの旧制高校では女子の入学者が認められた学校もある。ただ、すぐに新制の大学に吸収された。

９．世界の歴史からみた旧制高校

＜目次＞
９－１．帝国主義の時代
９－２．大戦間の時代　1920年代
９－３．第二次世界大戦の時代　1930～1945年
９－４．戦後の時代　1945年以後

これまでの旧制高校論は、どうしても日本国内の歴史からのみ語られた。しかし、旧制高校は世界史の大きな流れの中で出てきたものであり、世界的文脈における高等教育の「実験」であった。日本史の中だけで見るのは片手落ちである。まさに世界の歴史に位置づけられるからこそ、「世界遺産」にふさわしいと考えられるのである。そこで、ここでは、旧制高校の歴史を世界史の流れからみてみたい。



旧制高校があった1889～1947年は、世界史的には、帝国主義から第二次世界大戦に至る動乱の時代であるが、ふたつの大戦間は文化と平和の時代が訪れ、日本でも大正デモクラシーが花開いた。旧制高校がたくさん作られたのはこの大正デモクラシーの時代である。以下、赤字は上の図のキーワードである。

９－１．帝国主義の時代

世界では、西ヨーロッパ諸国の帝国主義により、列強の世界分割が進んだ。20世紀初年までに、アジア・アフリカ・大洋州の87%が欧米諸国の植民地または従属国となった。アジアへの侵略によって、中国はヨーロッパ各国に分割された。

日本にも欧米諸国はやってきて植民地化しようとした。鎖国をしていた日本はしぶしぶ開国したが、1868年、明治維新がおこった。明治政府は、植民地化を恐れて、「欧米に追いつけ」という西洋化・近代化政策をとった。欧米の言葉を急いで学ぶ必要があったので、1973年から各地に外国語学校が作られた。東京外国語学校は、1874年に東京英語学校と名称を変え、これが第一高等学校の前身となったのである。つまり、旧制高校は始めから外国語学校・英語学校としての起源をもっており、外国語や西洋の人文科学（哲学や古典）が重視されたのはこのためである。この西洋化政策は成功し、日本は西洋列強の植民地とならずにすんだのである。

世界の教育制度の確立

19世紀はヨーロッパで教育制度が確立した時代である。ヨーロッパでは、18世紀頃から啓蒙思想のもとで民衆教育の思想がさかんであったが、各国は国民教育の普及をめざして、初等・中等・高等教育という３つの階層の学校システムを整備した。そのモデルとなったのは、ドイツのプロイセン王国で1807年よりおこなわれた教育改革であり、現在のドイツの学校制度のもとが作られた。

中等教育についてみると、ドイツ（プロイセン）では、1812年にギムナジウムが国立の中等学校とされた。フランスでは、1802年の教育令（ナポレオン1世が公布）によって、リセが国立の中等学校と規定された。イギリスでは、1840年のグラマースクール法、1868年パブリック・スクール法などによって、グラマースクールやパブリックスクールが中等学校とされた。

高等教育についていうと、大学そのものは12世紀にはできていたが、これらは大学生の組合や聖職者学校がもとになったものであり、近代的な大学制度ができたのは19世紀のことである。やはりドイツのプロイセン王国によって1810年に創設されたベルリン大学が世界最初の近代的な国立の総合大学とされる。イギリスでは、オクスフォード大学・ケンブリッジ大学といった古典大学は12世紀からあったが、聖職者学校がもとになったものであった。イギリスで、産業革命後に技術者・科学者・教育者を育てるための近代的な大学が作られたのは、1836年のロンドン大学が始めである。なお、イギリスの大学や教育制度については丹野（2008，2012）が参考になる。

近代的な大学制度の中で、人文科学や自然科学などの学問が発展した。例えば、哲学については、19世紀はドイツ観念論哲学（カントやヘーゲル）とそれを引き継ぐ新カント派（リッケルト、ヴィンデルバント）が大きな

力をもった。これについては、私のベルリン大学論５部作を参照いただきたい（丹野、2020）。
　また、自然科学が大きく発展し、19世紀は「科学の世紀」と呼ばれ、熱力学、有機化学、進化論は三大業績といわれる。物理学・化学・生物学という自然科学の枠組みが完成したのである。自然科学は産業・技術の発展を促した。

明治政府の高等教育政策
　明治政府は、ヨーロッパ先進国をモデルにして、教育制度を確立した。1872（明治５）年に「学制」を敷いて、義務教育制度を作った。これは、フランスの学校制度を参考にしたもので、日本を大きく８つの「大学区」に分け、１大学区を32の「中学区」に分け、１中学区を210の小学区に分けて、それぞれの大学区に大学校を作り、それぞれの中学区に中学校、それぞれの小学区に小学校を作るというシステマティックな計画であったが、財政難のために実現したのはわずかであった。
　のちに８つの大学区のひとつひとつに高等学校が作られ、これが第一高等学校から第八高等学校といった旧制高校のナンバースクールのもとになったのである（ただし、大学区は後に大きく修正されたので、必ずしも厳密に旧制高校と対応するわけではない）。
　また、1886（明治19）年には、森有礼が学校令を出し、小学校・中学校・大学という学校制度を確立した。
　これにもとづいて、1886年の帝国大学令が出され、帝国大学が作られた。また、同1886年の中学校令によって高等中学校が作られ、これが旧制高校の始まりである。
　そして、1894年には高等学校令が出され、高等中学校は高等学校と名称変更になった。高等学校は、大学予科という位置づけであり、大学のための予備教育をする機関となった。
　このように、日本の高等教育は急速に整備された。こうした中で、旧制高等学校は、西洋の先進国とも異なる独自の発展を遂げ、世界で最も若く高等教育をおこなう学校となったのである。
　当時のヨーロッパの主流であったドイツ観念論哲学（カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル）や新カント派（リッケルト、ヴィンデルバント）は日本の哲学界を席巻した。これらは旧制高校の学生たちの常識となり、それはデカンショ節（デカルト、カント、ショーペンハウエル）にもあらわれている。
　また、明治政府は自然科学や技術にも力を入れた。各大学には理学部・医学部・工学部・農学部が作られた。旧制高校においても、その基礎として、物理学・化学・生物学（博物学）といった自然科学が必修となり、しっかりした教育がおこなわれた。

９－２．大戦間の時代　1920年代
　世界では、1919年に、列強の世界分割が爆発した第一次世界大戦が終結した。1920年には国際連盟が作られ、平和な時代が訪れた。
　国際連盟では、日本は、イギリス、フランス、イタリアと並んで、日本は常任理事国のひとつとなった。日本は、明治維新から50年で世界の先進国の「５大国」に登りつめた。国際連盟の事務局には、常任理事国からひとりずつ事務次長を出すことになり、日本からは**新渡戸稲造**が選ばれた。新渡戸は、第一高等学校の校長をつとめ、キリスト教にもとづく国際的・グローバルな思想を学生に広めた。新渡戸の思想に感化された旧制高校の弟子たちが、のちに国際的視点に立った活動をしたという点で、日本全体にも大きな影響を与えた（5000円札の肖像画で有名）。
　第一次大戦中の1917年にはロシア革命がおこり、1918年にはドイツ革命がおこり、社会主義運動が世界中でさかんになった。
　また、1920年代は、大戦間の文化高揚の時代であった。アメリカやヨーロッパでは、経済的に発展し、市民文化や都市文化が発展し、黄金の20年代などと呼ばれた。
　文化的には、第一次大戦への反省から、反戦・反物質主義に向かい、世界でいろいろな精神文化が生まれた。哲学では、論理実証主義のヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』（1922年）、現象学のフッサール『形式的論理学と超越論的論理学』（1929年）が発表された。また、ハイデッガー『存在と時間』(1927年)、ヤスパースは『哲学』（1932年）が出て、実存主義哲学が出発した（実存主義は第二次大戦後になって、サルトルの登場で世界中に広がることになる）。ヨーロッパでは、シュルレアリズム、ドイツ表現主義など、モダニズムの文化が花開いた。こうした芸術に対してはフロイトの精神分析学の影響も大きい。表現主義は、日本を含む世界各地の前衛芸術に影響を与え、現代芸術の先駆となった。
　自然科学の分野でも、量子力学が発展し、シュレディンガーの波動方程式（1926年）やハイゼンベルクの不確定性原理（1927年）などが発表された。

大正デモクラシー
　日本の大正デモクラシーは、このような世界的な文化思潮を受けたものである。吉野作造の民本主義が大きな影響を与え、政治的には普通選挙法が成立した。また、日本の社会全体が経済的に豊かになり、「市民文化」が初めて花開いた。
　文化的には、夏目漱石の門下の岩波文化人などの知識人や、理想主義的な白樺派の作家が活躍し、旧制高校の学生に影響を与えた。こうした動きは「大正教養主義」とも呼ばれる。この時期には、教育界全体が生徒の個性・自主的な学習を重視する傾向が強まり、ユニークな大正新教育運動もおこった。

大正デモクラシーと旧制高校
　学校制度についていうと、義務教育は、明治時代末1911年までには、国民の99%に達するほど普及したので、大正時代になると、人々の関心は高等教育へと向かったのである。産業の発展と近代社会の発達にともない、高等学校・専門学校への入学希望者が激増したので、1919～1926年の高等学校の増設がおこなわれた。また、官立だけでなく、公立・私立の高等学校も公認されるようになった。高等学校では、大正デモクラシーを背景に、自由主義・民主主義的な教育や学習の傾向が強まった。
　また、大正時代には、自然科学の発展もめざましく、この時期には、著名な科学者によって多くの研究機関が作られた。北里柴三郎による北里研究所（1915年）、 高峰譲吉らの提案による理化学研究所（1917年）、本多光太郎による金属材料研究所（1919年）などである。高等学校においても、自然科学を重視する傾向が高まった。旧制高校には、どのキャンパスにも、大きな物理学教室、化学教室、生物学（博物学）教室が作られており、実験や観察がしっかりとおこなわれた。旧制高校の自然科学教育のレベルは高かった。

９－３．第二次世界大戦の時代　1930～1945年

世界では、最初から広い植民地を持っていたイギリスやフランスに対して、出遅れたドイツ、イタリア、日本は対立するようになった。1929年の世界恐慌をきっかけとして対立が強まり、第二次世界大戦を引き起こした。

日本は、1931年に満州事変をおこし、国際連盟を脱退することになった。これを批判した新渡戸稲造は、軍部から強い攻撃を受けて、体調を崩し、1933年に亡くなった。軍部は独裁体制を強めて、1941年の太平洋戦争への道を突き進んだ。

戦争に勝つために、政府は学校教育をスリム化して、各学校の年限を短くした。高等学校も３年から２年に短縮された。実学や理科系を重視したため、基礎教育どころではなくなった。大正デモクラシーの自由な雰囲気は押しつぶされ、外国語や国際的な考え方は、戦争には邪魔になるので弾圧された。愛国的・国粋主義的な教育にとって代えられた。

1925年には、全国の学校で軍事教練が始まり、高等学校でも軍事教練がおこなわれた。

1943年には、文科系学生の徴兵猶予が解除されたために、文科系の学生の学徒出陣が加速された。例えば、東京大学の文学部では、1943年入学の学生の80％が軍隊へ行き、10％が戦死した。卒業できたのは、60％弱しかない。

９－４．戦後の時代　1945年以後

1945年に第二次世界大戦は終結した。日本はポツダム宣言を受け入れ、無条件降伏した。アメリカを中心とする連合国軍に占領され、国のシステム全体をアメリカ型に改造させられた。

学校制度については、旧制の複線型システムを廃して、アメリカ型の単線型システムに入れ替えて新制制度が出発した。現在の６－３－３－４制である。

高等教育についても、旧制のエリート養成を廃して、アメリカ型の市民教育の理念に入れ替えられた。1947年には、新制大学が発足した。この新制大学の中に、旧制高校は吸収された。この経過については次に述べる。

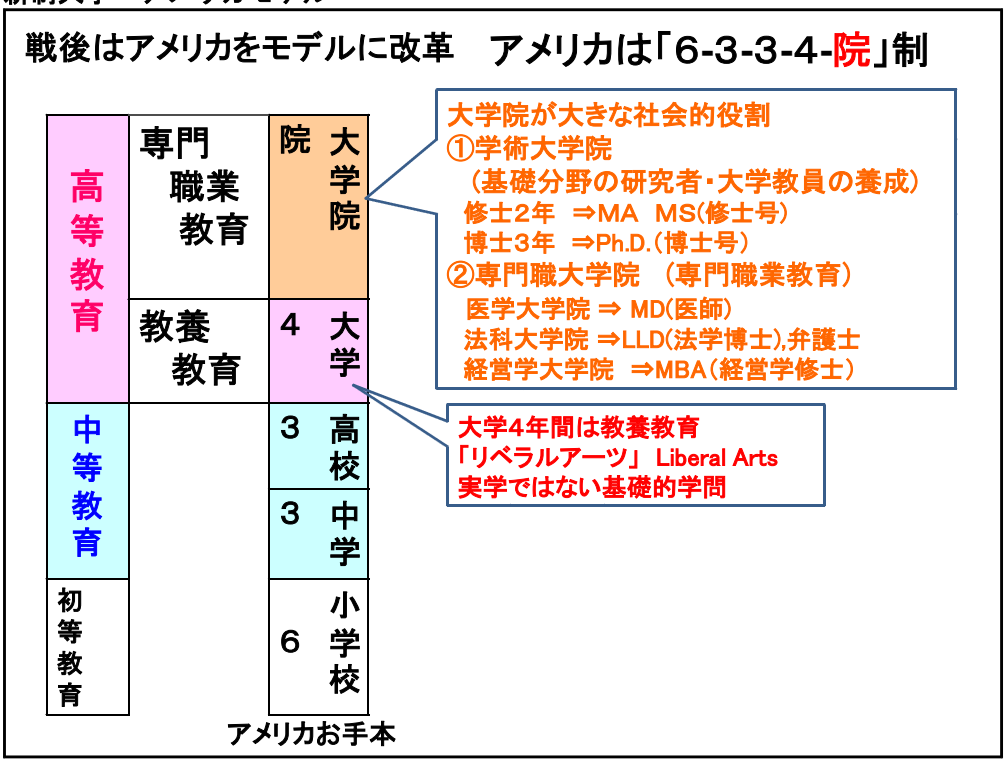
旧制高校から大学教養部への移行を指導したのは、当時の第一高等学校の校長だった矢内原忠雄である。彼は、当時東京帝国大学総長だった南原繁とともに、この構想を実現させた。なお、矢内原と南原はともに一高時代に新渡戸稲造のキリスト教と国際主義の影響を受けて弟子となった。

旧制高校が改組された大学教養部は、戦後の民主主義教育の先頭に立った。例えば、一高の校長をつとめた安倍能成と天野貞祐は、後に文部大臣となり、戦後の教育行政を指導した。

１０．旧制高校は戦後に消えたのではない

1945年に戦争が終わると、日本の学校制度はアメリカをお手本として大きく作り変えられた。当時のアメリカ占領軍の教育関係者には進歩的でリベラルな人が多く、ハーバード大学をモデルとして、理想的な大学制度を日本で実現しようとしたと言われる。

新制大学　アメリカモデル



６－３－３－４-院の制度

アメリカの学校制度は、州によって異なるが、多くは「６－３－３－４-院」制度をとっている。

初等教育は小学校（６年）、中等教育は中学校（３年）と高等学校（３年）からなり、高等教育は大学（４年）と大学院（数年）からなっている。前述のような単線型の学校制度である。

大学院で職業専門教育

「６-３-３-４-院」というように、「院」すなわち大学院が大切な位置を占めている。

法学・医学・経営学などの職業専門教育は、日本では大学で行われているのに対し、アメリカでは、大学ではなく、大学院でおこなわれているのである。

アメリカの大学院は、職業専門教育をおこなう専門職大学院 Professional School と、研究者を養成する学術大学院 Academic School に分かれる。前者についていうと、法学は法科大学院 Law School、医学は医学大学院 Medical School、経営学は経営学大学院 Business School などがある。

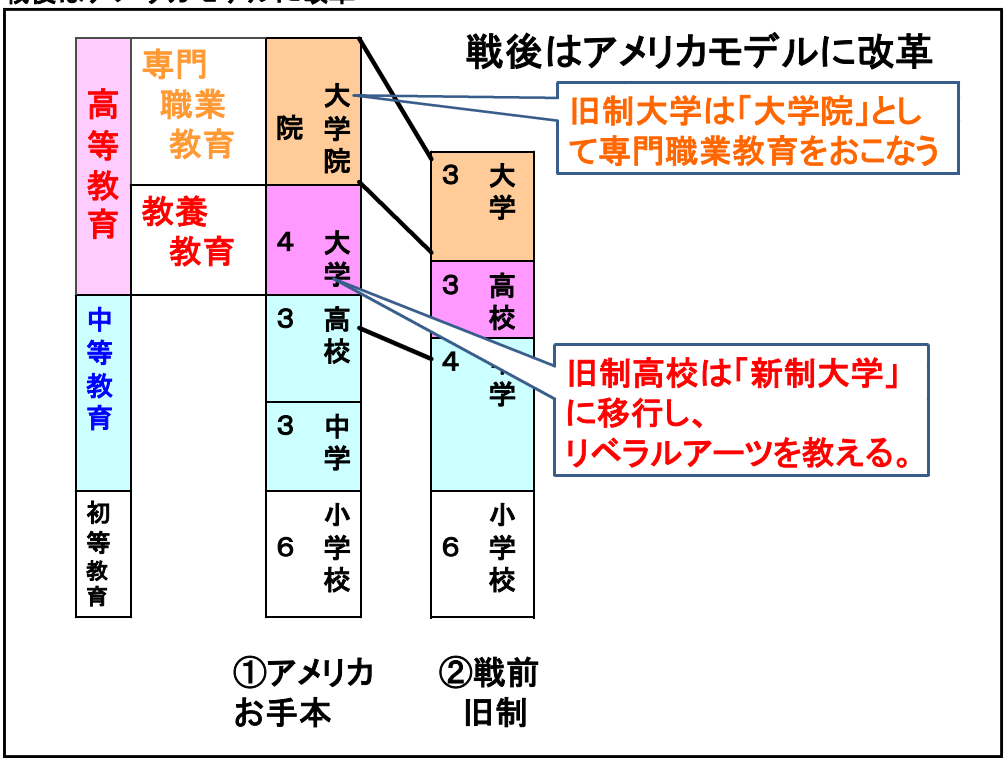
大学ではリベラルアーツ教育

大学院で職業専門教育を行っているならば、それでは大学ではいったい何を教えているのだろうか。一般に、アメリカの大学では、「リベラルアーツ」という基礎的な教養教育をおこなっているのである。これは、日本の文学部・理学部・教養学部などの教育にあたる。実学ではなく、基礎的な学問を教えている。

市民教育の理念

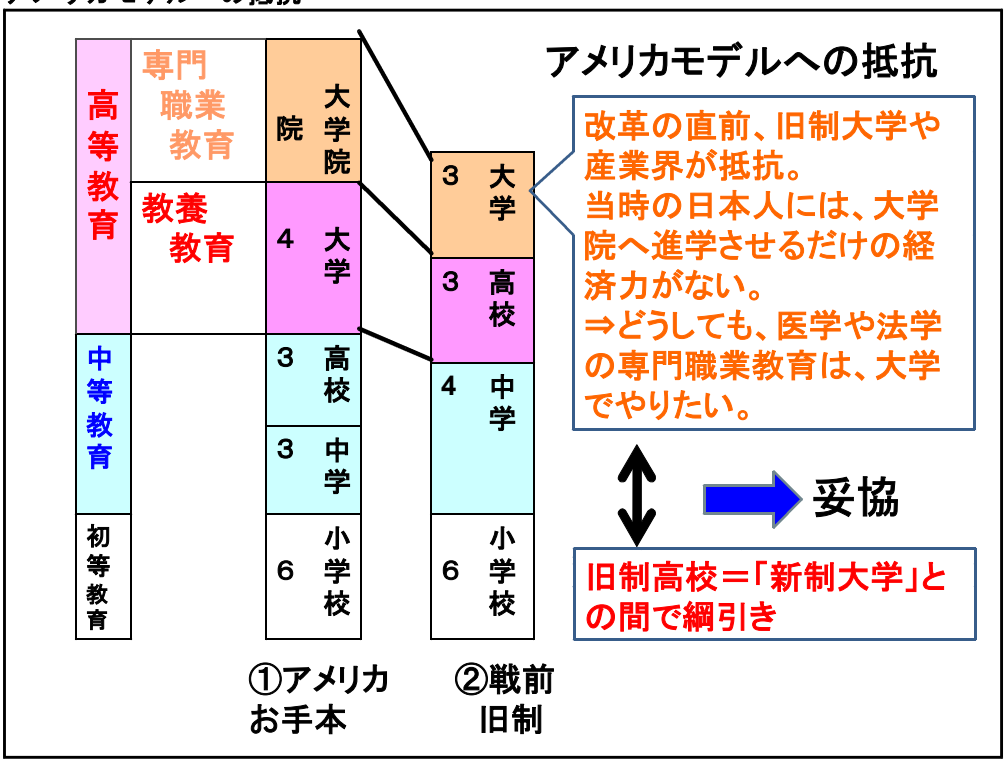
大学では職業専門教育をおこなわず、教養教育をおこなうということは、アメリカの大学の理念から来ている。アメリカ社会における大学の使命は、個々の分野の専門家やエリートを養成することよりも、「市民教育」にある。狭い専門にとらわれずに、広い視野から総合的に判断し、知識を批判的にとりいれ、民主的社会を作っていく実行力のある市民を養成することが大学の使命である。そのためにリベラルアーツ教育をおこなっている。

戦後はアメリカモデルに改革



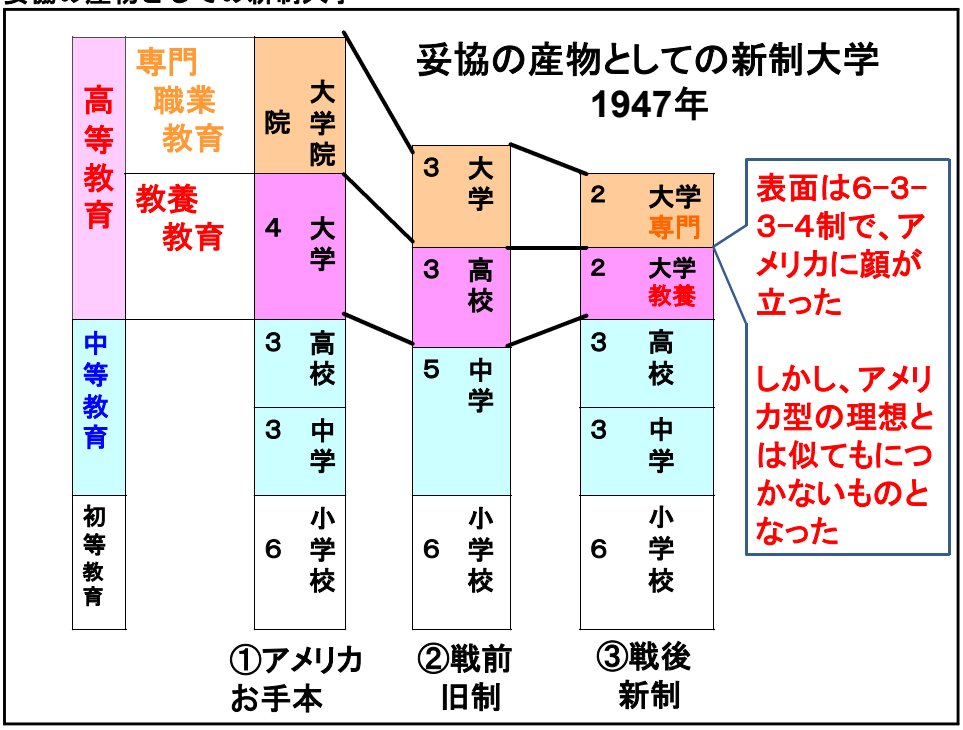
戦後すぐ、日本は、アメリカの「6－3－3－4－院」制度をお手本に作りかえられた。
図では、②が戦前の日本の学校制度（ヨーロッパ型）であり、①側がモデルとなるアメリカの学校制度である。
高等教育については、旧制高校でおこなわれていた教養教育を４年制の大学へ移し、旧制大学でおこなわれていた職業専門教育を大学院へと移そうとした。こうなれば、教養教育も職業専門教育も、戦前より年限が増えて、のびのびと教育ができるはずであった。

アメリカモデルへの抵抗



ところが、そうはならなかった。
いざ改革の時になって、戦前のように、大学において職業専門教育をおこないたいという一部の人たちの力が強く働いた。当時の日本の学生は大学院に進めるほどの経済力がなかったため、大学院に進む学生がいなくなると心配された。
その結果、旧制高校・新制大学との間で綱引きがあった。そして、妥協が成立した。

妥協の産物としての新制大学



妥協の産物として、1947年に新制大学ができあがった。

図の③のように、大学４年間をふたつに割り、前半２年は教養教育にあて、後半２年間は職業専門教育にあてるということになった。たしかに表面は６－３－３－４制であり、アメリカには「改革した」と顔が立った。しかし、アメリカ型の理想とは似ても似つかない中途半端なものができた。こうして戦後の新制大学は、アメリカ型でもヨーロッパ型でもない、非常に中途半端な形で発足したのである。

図をよく見て、教養教育と職業専門教育の変化を追ってみよう。

教養教育は、旧制高校では３年制だった（②）のが、アメリカを手本にすれば１年増えて４年制（①）となるはずだった、旧制高校の教師たちはのびのび市民教養教育をやれると張りきっていた。ところが、新制大学では逆に１年減らされて２年になってしまい（③）、教師たちには大きな失望を残すことになった。

一方、職業専門教育にしても同じことで、旧制大学では３年制であり（②）、アメリカを手本にすれば大学院でのびのびとできるはずだった（①）。ところが、新制大学では１年減らされて２年になってしまった（③）。そこで、旧制大学の教師たちに「教養教育が大学に割り込んで来た」といった不満を残すこととなった。図で②と③を比べてみても、戦前は６年だった高等教育が、戦後は４年に減り、弱体化していることがわかる。

つまり、戦後日本では、大学の４年間に、教養教育と職業専門教育をむりやり同居させてしまったために、きわめて窮屈となり、両者が互いに不満を持ち、いがみあうことにもなったわけである。前期課程教育については、こうした不幸な発足の事情が、現代まで綿々と尾を引いてきた。

もう一度、アメリカと日本を比べてみよう（①と③）。アメリカの高等教育は大学４年プラス大学院であるのに対し、日本の高等教育は基本的に大学４年で完結している。日本の高等教育のレベルはアメリカに比べて低すぎるとつねに批判されるが、このあたりにも原因がある。

また、日本の新制大学は、形式上は、確かにアメリカ型の４年制になったように見えるが、その中身は全く違ったものができあがった。大きな違いは教養教育である。アメリカが４年なのに対し、新制大学では２年である。

このように、戦後の新制大学は、外見はアメリカ型の看板をつけたものの、その理念はなかなか浸透せずに、実質的にはヨーロッパ型の中身がかなり強く残った。アメリカの制度を直接取り入れた前期課程教育（教養教育）や大学院がお荷物扱いされ、なかなか日本に根付かなかった。その後の大学問題は、つねに教養部と大学院の２つに集中したが、その背景にはこのような歴史的事情があった。

旧制高校は消滅したのではない　　新制大学に吸収されて生き残った

以上のように、旧制高校は、戦後には新制大学に吸収されて生き残った。旧制高校は消滅したと思っている人もいるようだが、決して消え去ったのではない。私が本論で強調したいのはこの点である。旧制高校は、新制大学の中の教養部（教養課程とか一般教育とも呼ばれた）という形で、受け継がれたのである。旧制高校の教官は、そのまま新制大学の教養部や教養課程の教官となったところが多い。

ただし、大きく変わったこともある。大学の理念は、戦前にはヨーロッパ型の専門家養成であったのに対し、戦後の新制大学では、アメリカ型の「市民を養成するための大学」へと変わった。旧制度では閉め出されていた女子が進学できるようになった。そして、教養部（一般教育）の内容も、戦前の旧制高校のようなヨーロッパ型の予備教育 専門基礎教育から、アメリカ型のリベラルアーツ（教養教育）へと変わった。また、全寮制もなくなった。このような変化はあったものの、旧制高校は「生き延びた」のである。

その後の教養部

新制大学の教養部（一般教育）は、その後、進学率が上がって大学が大衆化し、空洞化が進むようになった。そこで、1991年に、文部科学省は大学設置基準を大綱化した。つまり教養課程（一般教育）を各大学で自由に設計することができるようになった。その結果、教養部（教養課程、一般教育）を廃止したり改組する大学が多かった。教養部が残った大学としては、東京大学教養学部が有名である。

引用文献

文部科学省（1981）学制百年史 資料編.
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318188.htm
文部科学省（2008）諸外国の後期中等教育及び短期高等教育における職業教育.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/015/siryo/attach/1374960.htm
旧制高等学校資料保存会（1981）旧制高等学校全書 第３巻 教育編. 昭和出版.
旧制高等学校資料保存会（1983）旧制高等学校全書 第６巻 生活・教養編(１). 昭和出版.
旧制高等学校資料保存会（1984）旧制高等学校全書 第７巻 生活・教養編(２). 昭和出版.
旧制高等学校資料保存会（1985）旧制高等学校全書 第１巻 総説. 昭和出版.

篠原央憲ほか編（1969）わが青春・旧制高校. ノーベル書房.
筧田知義（1975）旧制高等学校教育の成立. ミネルヴァ書房.
筧田知義（1982）旧制高等学校教育の展開. ミネルヴァ書房.
高橋左門（1986）旧制高等学校全史、時潮社.
寺崎昌男（1990）高等教育. 細谷俊夫ほか編『新教育学大事典』第一法規出版.
渡部宗助（1990）高等学校（旧制）. 細谷俊夫ほか編『新教育学大事典』第一法規出版.
下村寅太郎（1992）朝日新聞、1992年1月13日
秦郁彦（2003）旧制高校物語. 文春新書.

倉田百三（1921）愛と認識との出発. 岩波文庫.
青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/000256/files/2590_20695.html
西田幾多郎（1911）善の研究. 岩波文庫.
青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/000182/files/946.html
阿部次郎（1914）三太郎の日記. 角川選書
青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/001421/files/50421_47273.html
北杜夫（1968）どくとるマンボウ青春記. 中公文庫.

丹野義彦（1994）アンケート：基礎演習を自己検証する. 小林康夫・船曳建夫編『知の技法：東京大学教養学部基礎演習テキスト』pp. 44-61、東京大学出版会.
丹野義彦（2008）ロンドンこころの臨床ツアー. 星和書店.
丹野義彦（2012）イギリスこころの臨床ツアー. 星和書店.
丹野義彦（2017）東京大学駒場学生相談所紀要第22号（2016年度）.

○丹野義彦のホームページ http://tannoy.sakura.ne.jp/

丹野義彦（2016）君は旧制一高を知っているか？ １．一橋キャンパス編.
http://tannoy.sakura.ne.jp/hitotsubashi.pdf
丹野義彦（2020）君は旧制一高を知っているか？ ２．向丘キャンパス編.
http://tannoy.sakura.ne.jp/mukou.pdf
丹野義彦（2016）旧制高知高等学校を歩いてみよう.
http://tannoy.sakura.ne.jp/kouchi.pdf
丹野義彦（2019）旧制松山高等学校を歩いてみよう.
http://tannoy.sakura.ne.jp/matsuyama.pdf
丹野義彦（2016）台湾の旧制高校を歩いてみよう.
http://tannoy.sakura.ne.jp/taipei.pdf
丹野義彦（2020）ベルリン大学の栄光 第１部～第５部.
http://tannoy.sakura.ne.jp/idealism.pdf など

○各地の旧制高校の跡地をめぐるためには、下記のサイトが役に立つ。
通堂主人「華麗なる旧制高校巡礼」
http://qsay55.starfree.jp/

丹野義彦：東京大学名誉教授 （元東京大学 教養学部 心理・教育学部会教授）

●元のページに戻る
http://tannoy.sakura.ne.jp/